に座下皆茫然自失たりしこと久しかりしと、眞個の那人の放行は瓦礫も光を生ずる、和尚の行履は佛眼も窺ひ難き境涯であつたのである。

佛印と蘇東坡

或時蘇東坡が佛印禪師と散歩の次て觀世音の像を祀れる所に至つた。之を見ると觀音樣は珠數を持つて居る。そこで蘇東坡が佛印に問ふて曰く、「觀世音が珠數を持つて居るのは可笑しいでは無いか、自分が佛樣なら珠數を持つには及ばぬ筈」佛印が曰く「さうで無い、觀音樣は頻りに念佛を唱へて居るのですよ、百八煩惱を表したる珠數を繰つて御念佛」東坡曰く「それが可笑しいな、觀音樣が何を唱へるのです」佛印曰く、觀世音が矢張り觀世音菩薩を唱へて居る」東坡曰く「それぢや自分の名を唱へて居るぢや無いか」佛印曰く「左樣さ、古に曰く人に求めるよりは己に求むるに如かずと言ふは此處にあるのだ」觀世音菩薩が觀世音菩薩を念ずる此處が禪の極意だ、決して外に向つて求めるので無い、他に向つて幸福快樂安心を求めず己れ自ら之を求めて自己の本心を徹見して茲に大安心を得やうといふのが、所謂禪宗の反省主義である。

授業中の高鼾

黃檗宗の管長高津柏樹老師が、未だ管長となられぬ前、東京小石川白山の一陋屋に起臥し、當時天台宗大學に教鞭を取つて居た事がある。多分論語の講義を受持つて居つたかと思ふが、或る夏の日の事、丁使師が講義をして居ると、聽講の學生の四五名がクラリ〱と居眠を初めた。

老師の禪機に於ける活作略は實に三軍を叱咤するばかりの勢、迚も眠氣などを催す筈はないのであるが、夏の日の午後の課業に論語の講義であるから、聽講の學生が居眠りを初めるのも無理はない。所が高津老漢は居眠りの學生を見て何と言はるゝかと思ふと「貴下方も定めし眠いのぢやから暫く一所に此處で眠り

ませう」といつて、本を閉ぢ、椅子に腰をかけたまゝぐう／＼と高鼾をして眠つて仕舞た。一堂の學生は事の以外に驚き、唯だ啞然として師の目覺むるを待つのみであつた。

無限の慈悲

昔、江戸下谷の高岸寺に、何時の頃か二人の弟子があつて、一人は身に固く戒律を持ち、日常に勤行懈怠なく勤めて居たが、他の一人は、戒律は勿論、常に大酒を呑み好んで喧嘩口論を事とし、實に出家としてあるまじき所行のみであつた、此惡僧が一日寺の什物を持ち出して賣らうとするのを、他の一僧が見付けて頻りに諫を加へたけれども聞き入れぬ、止むなく此由を住持に告げ「若し彼の惡僧を追ひ出さなかつたなら寺の爲めに宜しくあるまい」と云ふと、住持はさしたる風もなく「一先づ說諭して見やう」とのみ、其後唯一度嚴しく戒めた丈で捨て置いた、併し其惡僧は別に改めた處もなく、また或時佛具を賣らうとした、そこで再び之を住持に告げると、住持は矢張「マア暫く其まゝに捨て置けよ、機を見て說諭してやらう」と云ふて格別氣にもとめぬ樣子、是に於て彼の善僧は憤然として、若し此まゝに捨てゝ置いたなら、行々は寺に禍を及ぼす事ともならず、彼を追ひ出さぬならば我を追出して下さい」と迫つたすると住持ははら／＼と熱い涙を流し「さて／＼謂れなき事を云ふものかな、今は汝が夫れ程までに願ふのならば詮方なし、汝の望み通り暇を遣はさう、彼の惡僧はモー暫く我が許に置かねばならぬ」と答へた、善僧は大に住持を恨み「我等が斯く乞ふたなら必らず彼の惡僧を追ひ出して下さる事と思ひの外の御挨拶、彼惡僧を其儘にして置いて、我等の方に暇を給はるとは、餘りに依怙の御仕打ではござらぬか」と問ふと、住持は「否」と頭を振り「御身は今我が寺を出ても既に僧一人の勤めが出來るから、何れへ行くとも差支はない、然るに彼の惡僧は今此處を出たならば忽ち捕はれて罪人となるらんも計難い、若し左樣なると我が德も捨てられて一人の弟子を失ふ次第である、

夫故に今暫くわが許に置いて彼が命を延ばし、且つは嚴しく敎誨もしたならば、或は善心に立ち返り、善人となる事もあらう、其末を樂しみに今暫く我許に置かうと云ふのである、故に汝若し彼の僧を置くのが厭やであるなら、何時でも暇を遣はすから何れへなりと去るがよい」といはれた、後ち彼の惡僧は此由を聞いて師恩の高大なるに感じ遂に全く善心に立ち歸つたと云ふ。

張天覺の無佛論

宋の時代に張天覺といふ人があつた。此の人は又張商英と稱し無盡居士とも號して、なか〳〵の豪傑であつた。或時寺へ行て大藏經を見た、處が例の七千餘卷も有る大部のものであつて、それを帙に入れて立派に棚に飾つてあつた、然るに張天覺は儒敎を學んて、孔子を非常に崇拜して居たから、此釋尊の大部の經卷を見て、頗る面白くない感情が起つた。即ち孔子の著書は論語四卷ぐらゐて、釋尊のそれとは到底比較することの出來ない有樣であるから、少し殘念なといふ樣な心が起つたので、早速家に歸りて、其夜は物を考へて、寢りに就かない、乃て細君が「如何なる理由て、さうお沈思なさるのてす」と問うた所が、張天覺は少し考へこんて「己は今無佛論を書かうと思つて居る」と答へると、細君は怜悧な人てあつたと見へて、直ちに「無佛と云ふなら、已に論ずる必要はありますまい」と云ふたので、一寸鋒を摧かれ、其時は遂に論を書くことを止めた。

其後自身の友達の宅に遊びに往つて、フト板の上を見ると、維摩經が載つてゐる何となしに手に取つて一二枚を讀んて見ると、如何にも面白いので、讀みかけて歸る氣になれない、それて友に「萬望貸して吳れる樣に」と云うて持ち歸り、眞劍になつて熟讀して居る。これを見た細君は、又不審に思うて、「何を御勉强なさるのてすか」と尋ねると「イヤ維摩經といふて、釋迦の說いた書てあるが、讀んで見ると至極面白い」と云つた、すると細君が「サー、さう云ふ書物を好く讀んだ後、無佛論をお書きなさ

れたら宜しう御座りませう」と云ふたので、如何な張天覺も其言に對して慄然として、以來佛教を研究して、遂には非常な佛教信者になり、彼の「護法論」三卷を書いた、此書は日本で翻刻が出來て、廣く行はれて居る。

此張天覺の如きも、初めは實に食はず嫌ひであつたが、フトした處から味を嘗めて見ると云ふに云はれぬ、微妙の味があつて、遂には止められなくなつたのである、今日の人々も初めから嫌ひと曰はずに、少しは佛典祖錄を繙いて見るがよい、直下更に纎翳なく、全機處に隨て齊しく彰るゝてあらう。

蔡君謨髯の安住所に迷ふ

昔し蔡君謨と云ふ人があつた、大層長い麗しい髯をもつて居た、或時宮中に於て御陪食を仰せつかつたが、其時、陛下が蔡君謨の美髯を御覽になつて「汝は實に美い髯を持て居るが全體寢る時は其髯を夜具の内へ入れて寢るか外に出して寢るか」とお尋ねになつた、處が蔡君謨は今迄髯の置處を兎や角と心配したことがないから赤面して「一向に心附きませぬ」とお答したがサア宅へ歸つて寢てから苦になつて堪らぬ、夜具の外へ出して見たり夜具の内へ入れて見たりして終夜眠られなかつたと云ふ話がある。地獄極樂の心配も蔡君謨の煩悶と同じ事であるが、此疑問が又必要であつて、大疑なくば大悟もない、一度疑問が起つたならば之を好個の時節因緣として眞面目に實參實究すべきである。

山鹿素行禪の修養

山鹿素行甚五左衛門は、林道春門下の出にして、當世の道學者にして、又絕世の軍學者で在つた、更に禪を京五山の名師宗匠に參ぜられた事が明かである、その筆に成れる配所殘筆に

此時分は別面佛法を貴候、諸五山之名知識に逢參覺悟道を樂しみ、隱元禪師へ迄相

見仕候、然共我等不器用故に候哉、程朱の學を仕り候ては、持敬靜坐之工夫に陷り候て人品沈默に相成樣に覺候、朱子學よりは、老莊禪の作法は活達自由に候て、性心の作用、天地一枚之妙用、高く相成樣に被存候、何事も本心自性の用所を以て仕候故滯處無之、乾坤打破仕候ても、萬不變之一理は洒落なる處無疑存候。

とあるが、實に此の一節に依るも、全く山鹿素行の禪道の修養充分にして、大に得る處有りしことが思ひ知らるのてある。此の山鹿素行を學んだ、吉田松蔭の伯父、玉木文之進に就て、大和魂の權化と言はるゝ乃木大將は敎を受けられたのてある。明治聖代の終りに、千萬世不朽の歷史上に一大光彩を放たれた、將軍の此事ありしは、誠に宜なるかなてある、又山鹿素行自筆の日記帳に

萬延元年十月六日、遊天澤寺、會隱元禪師、臨濟二十六世黃檗山住持云、相見大功德寔千歲希遇也、弟子無一法可問、伏乞和尙無事云々。

とある、此時誠に好商量が在つたが今は記せず、實に山鹿素行が、大光普照國師に相見して鉗鎚を受け、三昧悟入せる蹤跡は明かてある。

天龍寺龍淵和尙のパイプ

記者は僅かに一回の相見を得たのみてあるから、あまりに委しき日常其他のことに就いては知るよしもないが、只感じて來たのはいかにも親切なる性情が、一言一句の間にも窺はれるのてある。侍者の人から聞き得た話に、面白い逸話があつた、それは天龍寺の所在地なる嵯峨には處々に竹藪がある、一日師は徒然のあまり、散步に出られて一本の形面白き自然竹を發見した、一見パイプ形になつて居る、師は其節を拔いて早速パイプに造り上げ、軸に『一縷濃煙草盧忘』行書で彫り付けられ、背面の方に『食後によろし』と滴水和尙が草書て又深く彫りつけた。それを或人が貰ひ受けて金の吸口をつけ家寶として居るが、師は斯の如く一本のパイプを拵へるにも用意の點が

逢ふて居る。兩句を味ふと無限の甘味が涌き出づるてはないか。

拈華微笑の端的

佛陀が印度靈鷲山上の大説法には、八萬四千人の聽衆があつたと傳へられて居る、勿論其内には男僧あり尼僧あり、國王あり大臣あり、長者あり居士あり、信男信女、童男童女まであつたに相違ない。この山は巖石峨々たる所ありと雖も、自らなる鷲の翼に似て、綠色濃き菩提樹下、淸風颯々として大法を宣布するには好箇の場所である。この山に此澤山の聽衆が片唾を呑んで今や大聖佛陀の御説法が初まるならんと待ち構へて居る、佛陀は愈々高座の吉祥草に上り給ふた。どんな説法かと一同靜肅になつて幾萬の眼が悉く佛陀の一身に集まる、此時佛陀は無言の儘、折柄信者の一人によつて捧げられた金波羅華を取つて、キリ、と一とひねりひねつて見せられた、八萬の聽衆歷然として其眞意を知るものは一人もなかつた、佛陀の大説法は當に終りを告げたのである。

此時、お弟子中の一人たる摩訶迦葉のみ、何を感じたのかニツコリと破顏一番せられた、佛陀は遙かに迦葉の笑顏を見て「我れに正法眼藏涅槃妙心の法門あり摩訶迦葉に附屬すと仰つて座を下られた。これが有名なる正法相傳の適意である。

南天棒佐久間將軍を推倒す

前の松島瑞巖寺住職で臨濟きつての機鋒峭峻たる師家として聞えたる、中原鄧州南天棒老師は跌宕卓落洒脱なところに面白い味がある、其豪放な所は曹洞の故環溪禪師に似たところがある。故山岡鐵舟居士とは能く置酒談論に夜を明かしたことも度々あつた、二人でやると大抵八升は傾け盡したさうである。老師は曾て瑞巖寺の住職であつた頃第二師團長佐久間將軍が「坊主なんてものは無用の長物さ」となど〻話すと南天棒時に沈默して居つたが突然立つて大喝一聲の下に將軍を推倒し首筋を押へてギユ

ウ〳〵云はしめ、「サードーぢや更に一句を道へ！」とやりこめたので將軍は爾來老師に推服して居つたとの事てある。こゝらの作略は彼の環溪禪師が廟堂て大臣參議等の列座の中て伊藤參議故公爵伊藤博文を捉えて「ウンお前が伊藤博文か、まだ若いのに利口ぢやさうなの、聞いて百文見て一文かハヽヽヽ」とやつたのと好一對の話てある、眞箇の衲僧は權門に媚びぬ、其處に欽仰すべき活機があるのてある。

慧可の決心と正法附屬

達磨の法燈を傳承して支那に於ける禪門の第二祖と仰がるゝに至つた慧可大師、初めの名を神光といひ、魏の洛陽の人てあつたが、幼少の頃から群籍を涉獵して夙に佛典に通じ、造詣既に淺くなかつた。一日般若經を見て其眞實妙理を自得し、更に業を修すること八年一夜夢に嵩山に大智識のあることを知つて、乃ち來つて達磨に見えたのは正に大通二年、達磨が支那に渡つた翌年てある。しかし達磨は容易に神光の入るを許さず、只自ら端坐して默想を擅にするのみてあつたが、神光もさるもの敢て屈せず自ら勵まして求法に殉せんことを心に誓つた。

時は即ち大通二年十二月九日、朔風肌を刺して窓前の積雪今や膝を沒せんとするの時、携へたりし腰刀を執つて其左腕を斷つ、達磨の目前に呈して求道の赤心を露はした、達磨も熱誠に動かされて入室を許し、接得正に八ヶ年、最後に慧可に告げていふ「昔釋迦如來、正法眼藏を以て大迦葉に附し、轉じて我に至る。我今これを汝に授く護持して斷絶せしむること莫れ」と、正法を傳授するに至つたのてある。

猫の妙術にて豁然大悟

故山岡鐵舟居士なども「猫の妙術」と題して、特にこの話を喜んて居られた。よく味ふ時には餘程の妙味が含まれて居るやうに思ふ。昔ある處に勝軒と云へる劍術家あり、其家に大なる鼠出てゝ暴れ廻る事一方てはない。勝軒憎き奴と思ひ、早速鼠取藥

を以て之を取らんと計りたれど、鼠賢明にして、容易に之を喰はぬ。加かず、鼠には猫に限ると早速近隣より借り來りたる、眼光爛々として虎髯逞しき猫一疋、之れなら大丈夫と見て居ると軈て鼠は梁の一隅に現れた、猫は之を見るより直ちに身構へに取りかゝる。暫く睨み合ひをして居たが、忽ち身を飜したる鼠は件の猫を目懸けて飛び來り、勢ひ凄まじく喰ひ付いた。虎髯の大猫は散々の體で逃げ出して了ふ。勝軒此有様を見て、こは尋常一樣の猫では適はずと、更に近傍の大猫を狩り集め、第二の選に入つたるは、鼻先の黒い實に骨格逞ましげなる大猫である、これなら大丈夫と喜んで我家へ連れて來た。夜半になると鼠は床の隅に脊壁の陣を張り、猫は此方に戰鬪準備、兩々相對して正に龍虎の爭ひの如く、暫く何れが勝とも優劣がつかない、只睨み合のみして居たのであるが、軈て猫は何と思うたか、後をも見ずに逃げ出した。鼠は天下無敵と云はぬばかり、暴れ廻ること例の出し、何分、其素早さこと電光の如く、出沒自在なること石火のそれにも似たる鼠のことゝて容易に之を捕へ得べき猫が見付からぬ。第三に隣村より探し出したるは、鼠にかけては未だ一匹も捕へ損ねたことのないと云ふ眞黒な逸物、然るに之を供ひ來りたる勝軒、我家の門迄來ると、黒猫はどうしたことやら、押せども引けども門を入らぬ、一寸油斷をして居る間に逃げ歸つて了つたのである。

第四番目には、山二つ越えたる彼方の村に無類逸物の古猫ありと聞き、勝軒之を借り來らせけるに、こはそも如何に、形は鈍物の如く、ハキ／＼ともせず、實に古いとぼけたる樣子、無論駄目かと思ふて居たが、不思議なる哉、さしもの暴れ鼠もこの猫を見るや、身すくみて動かず、猫は悠々として引つ獲へた。勝軒意外の感に打たれて其夜は床についたのである。夜半に至ると、勝軒の枕元にひそ／＼と話聲がする、見るともなく枕を擡ると件の猫共はぐるり車坐になり、古猫を上座に請して、何れも其前に跪き「吾等は相當に名を得たる者のみにて、未だ曾つて不覺を取りたることなきに、此家の老鼠には全く平降せり、御身は如何なる術をか心得て、彼の鼠を容易に捕

り玉ひしか、願くば其妙術を吾等にも傳へ玉へ！」と誠心こめて賴み入る樣子。古猫は「お話いたす程のこともなけれど、兎に角諸猫が修行の程を承り、然る後にせむ」との答へに第一に進み出てたるは、例の鼠に喰ひ付かれたる虎髯の猫「某甲は子猫の時より早業を以て名を取り七尺の屛風も容易に飛び越え、細少の穴をもくゞり、如何なる鼠と雖も捕へ損じたることなし」古猫聞き了りて「然らば何故捕へざるや、汝の修行は只所作のみ、巧盡る時は却つて身を害うとあり、これ汝の鼠に喰付かれし所以なり」と、懇ろに諭した。次に出でたるは鼻黑の大猫、鼠と睨み合をして逃げ出した先生である。「我が思ふ處は武術は氣然を貴ぶ、故に氣を練ること久し、今其氣豁達至極にして天地に充るが如し、されば聲に隨ひ響に應じて、別に所作を用ひることなく所作自然に湧く」と、古猫の云く、「夫れなら何故此家の鼠を捕へぬ、汝の修行は氣の勢にて働くも、氣の善なるものに非ず、我破りて進まんとすれば敵も亦破りて來る、豈我のみ强にして敵は悉く弱のみならんや」と、鼻黑の大猫、唯々として下る。續いて進み出たるは、勝軒の門先より逃げ戻つたる黑猫なり。「我は心を練ること久し、心平かなれば如何なる者も來りて映ず、勢をなさず、物と爭はず、相和して戻らず、我術は帷幕以て礫を受くるが如し、如何なる强鼠も我に敵する者なし」古猫大笑して曰く、「然らば、何故に此家の鼠を、捕へざるや汝の和は自然の和に非ずして和をなさんと思ふか故に、强ひて思うて和をなすに過ぎず、臨機の妙用なし」と。時に三匹の猫進み出てゝ御身の妙術を語り聞せ玉へとつめ寄つた。古猫曰く「我れ何の術をか用ひばや、無心にして自然に應ずるのみ」と、更に語をついて「我隣村に老猫あり、終日眠つて木にて作りたるが如し、曾つて鼠を捕へたることなし、我この老猫に及ばざること遠し」と、慨嘆した。三匹の猫、不思議に堪へ兼ねて「そは如何なる次第にや」と問ふ、古猫答へて、「彼の居るところ近傍更に一匹の鼠なしあゝ我は彼に及ばざる遠し」と。勝軒先生、古猫の說話を聞いて豁然として劍道の奧義を大悟せりと。

こは劍法に就いて作意せる一場の寓話ではあるが、世間萬般の敎訓談として將亦禪

機の妙用として頗る面白いところがある。

生れたまゝの赤兒となれ

退耕庵が曾て東京谷中全生庵に在錫の時に、理學や法學や文學や其他いろ〳〵の學者の先生連が打揃うて參禪を請ふた事がある。其時に和尚は席に有合ふ茶碗に湯をなみ〳〵とつぎて諸先生連に向ひ「サアこの上にまだ〳〵湯を盛つて見られよ」と告げた諸先生笑つて曰く、この上につぐ時は溢るばかりにて何の役にも立ちませぬ」と云ふや、和尚すかさず單刀直入示して曰く、「サーそこぢやて、子等が胸中は既に諸種の學問でなみ〳〵としてをる、その樣な處に禪を容れるのは心苦しいばかりで何の役にも立たぬ、禪に志あらば、先づ自ら學を忘れ、自ら識を棄てゝ、生れたまゝの赤兒となり得るの活手段を捉へて後再び老衲が處に來れ」と、隨分無理ぢやと云ふ人もあらうが、虚心坦懷に工夫一番し見よ、空虚なる茶碗と生れたまゝの赤兒とは兩々共に是れ作家の爐鞴餘り異つた事でもあるまい。

山岡鐵舟の劍道禪

山岡鐵舟は元と徳川家の指南番某の門人になつて擊劍を稽固した、幾ら擊劍を修行してもなか〳〵發達しない、そこで鎌倉の圓覺寺に行つて今北洪川和尚の門を叩き眞面目に參禪をやつた、其時に公案を授けられたが、其公案は「兩刃鋒を交へて相避けず」一生懸命になつて双方で擊劍をやる一歩を避ければ一刀兩斷である「兩刃鋒を交へて相避けず」と云ふは、曹洞宗の中興の祖師と言はれた洞山大師の五位と云ふものゝ中にある、其公案を授かつて三年間ズット坐つて愈々其公案を透得して後、元との先生と逢つて見ると最初公案の透らない時には、擊劍の先生が三尺も高く見えて打つことが出來なかつたが其公案を透得して以來は、三尺も低く見えて自由自在に打つことが出來た。そこで忽ちに先生は降參をしたといふ話である。氷凌上に向つて行くは

素是れ禪家の本分、鐵舟はこの本分を體得したのてある。

横尾賢宗と中村敬宇

中村敬宇は古い博士て亦偉い學者てあるが、横尾賢宗和尚とは別懇の間柄てある、和尚一日博士を尋ねて行くと「今日は一つ私の師匠になつて下さい」「ハア博士先生の師匠となるのは大變喜ばしい話だ承知しませう」と云ふと、敬宇先生「それは早速恭ない」と、問ひ試みらるゝは大乘の極致、法華經を丸て暗誦して居つて、提婆品に斯う云ふ事がある。いや壽量品に斯う云ふことがある如何、との質問、和尚も又幸ひ法華經は案外承知して居るので、それは斯う言ふ事だ、それは斯うだと逆順縱横の答辨に、敬宇は寧ろ意外の面付、「貴僧は禪宗ては無いか禪宗は不立文字と言ふがなか〳〵明るいな」「貴方は不立文字といふことは學問をしない學問のない事だと思つて居りますか」「全く思つて居る」「貴方は董其昌が好きて書をかくがどうてす董其昌を慣つて居る中は本當の書家てないてせうな」「ヘエさうてす手本通りやつて居るやうてはいけない」「さうてせう手本を離れたところて初て書家と言ふことが出來るてせう」「勿論さうてす」「不立文字はその手本離れの出來た所を云ふのてす」と云ふと、先生横手を打つて「誠にあり難い初て不立文字のことだ分りました」と言つて喜び、後に奉書に書いて丁寧な禮狀を和尚の處へやつたと云ふことてある。

誠拙伊達公の頭を撲る

鎌倉圓覺寺の住持として有名な大德誠拙和尚、此人の生地は宇和島てあるが、伊達侯の菩提所佛海寺の靈印和尚の御弟子になつてまだ雛僧の時てある、時に伊達侯が佛海寺へ御出てになりて色々靈印和尚と御物語の次て「雛僧乃公の肩を打て」と言ふ。殿様の仰せだから仕方が無い、後ろへ廻つて頻りに槌いて居る、他の雛僧だと殿様に遠慮して輕く打つから餘り應へない、誠拙は構はない、どん〳〵撲り付けた、ア、大

層貴樣の打方は利いて宜い雛僧だ、此頃乃公が江戸へ出てな、皈りに良い法衣を買つて來てやるから今二十ばかり槌いて呉れ」「ハイ左樣てすか難有うございます」と、暫く槌いた、其日は其儘皈つた、間もなく伊達侯は參勤交代に江戸へ出られて御皈りになつてから相變らず佛海寺へ參りまして靈印和尚と色々の御物語、又「雛僧乃公の肩を槌け、なか〳〵貴樣は上手だ」と言ふ、誠拙の雛僧さん暫く槌いて居たが「時に殿樣伺ひますが此前法衣を買つて下さるといふ御話してありました法衣はどうなりましたか」「ウン法衣か、ツイ買はずに來た」と言ふと、誠拙大に怒つて「此野郎、武士に似合ぬ二言な奴だ」と云つて頭からポカンと撲つた。殿樣も是には驚いた、ガーンと言つた、驚いたのは靈印和尚てある。是は大變な事だ、手討にてもなつてはならぬ、飛んでも無い事をしたと心配して居る。伊達侯の言はるゝには「イヤ隨分酷くやられた、併し此宇和島の中て乃公の頭を槌つ者は此雛僧一人てある。末頼母しい奴てあるから隨分可愛がつて育てゝやれ」此言葉に依り益々誠拙の雛僧を大事に致し居つたが果せるかな、後に至つて圓覺寺の住職となり、世に名だゝる禪僧して稱譽さるゝに至つたのてある。

圓覺寺改築の折柄に江戸深川の米屋て白木屋某と云ふ富豪があつた、此人が百金の財を御寄附申上げたいと言つて態々持參して行つた、その時に誠拙和尚は勝手元の圍爐に火を移し頻りにお粥を炊いて居る。そこへ百金持參致して「之を御寄附申上げたい」と言ふと、サッパリ難有うともなんとも言はぬ、只「さうか」と言ふて頻りにお粥を炊いて居る、普通の坊さんならば出て來て難有うの三度や五遍言つて頭の破れる程打附けて御辭義をするのである、けれども誠拙和尚サッパリ構はない、白木屋の方ても少し癪に障る、是れ丈けの大金を寄附するのに難有うとも何とも言はぬ、そこで不平を並べた。時に誠拙和尚「ナニ貴樣が自分で金錢を出して自分の功德を積むのに己が御禮を言ふ譯は無い」と言はれた。是位な勢ひてあるから所謂法に依つて住し少しも動かず、剛健なる超世絕倫の禪僧として今日に傳へられて居るのである。

女郎の頭髮を剃りし禪僧

昔或禪僧が女郎買に參つたといふ御話がある、女郎買に行つたけれ共女郎が寢坊で起きない鼻から提燈ばかり出して居る、寢てばかり居つてサッパリ役に立たぬ、癪に障つてならない、箇奴起してやらう、何にか惡戲をしたら起きるだらうと思つて搜して見ると鏡臺がある、抽斗を明けて見ると剃刀がある、是幸ひとイキナリ女郎の頭の毛を少し剃掛けた、能く寢る奴だな、是れでも起ぬか、是でもかと段々剃つて行くにどうしても起きない、トゥ／＼頭の毛を殘らず剃つて仕舞つた。そこで坊さんも考へた、斯う云ふ者に起きられちや大變だ、と早速下へ行つて勘定して外へ出た、女郎の方ぢや其事を知らぬから、翌朝まで寢て仕舞つた、朝になつて起きて見ると坊さんが居ない、御客さんが居ない、サア坊さん何處へ行つた、御客樣何處へ行つた、坊さん何處へ行つた、と云つて頻りに寢惚眼で搜す、其中に自分の頭へ手を當てヽヤア坊さんが此處に居た、そんなら私は何處へ行つたと言つた事がある、自分の心を外に馳せて見聞覺知にばかり心を用ゐて精神に何等の宿るところが無いと自分が何處へ行つたか知れないやうになつて仕舞ふ。その己を御留守にしないやうに心の外に向ふ奴を自己の方に向けて行かうといふのを回光返照と禪宗の方で申して居る。

女子の宣誓と龍關和尚

龍關和尚曾て年若き頃、如何せし事か或る金滿家の娘と遂に割り無き中となりて、供に手に手を取り遠く出奔した。身は僧侶の事なれば、是れぞと云ふ職業のあらう筈もなく、一時糊口に困りし爲めに彫刻師となりて、其の日を暮らして居つた。一日大に省る處ありて、女を側近く呼び寄せて曰く「衲の友人等は皆既に禪宗の修業を成就して、今は悉く大寺名藍に住して多くの人を接化して居るにも關らず、われ獨り僅かに彫刻師となりて、一生空しく終るは如何にも忍び難き事、又殘念なる事である」と、

嘆息すると、其女も尋常一樣の婦女でなかつた、大いに和尙の志を聞いて喜び勇み早速自分の衣服その他一切の所持品を悉く賣却して、和尙の爲めに僧侶としての一通りの服裝を整へ、自ら帶を裂きて手巾を縫ひ、一夜窃に丈なす黑髮を斬つて心となし和尙に呈して言はるゝ樣「妾が心事は只和尙が大善知識となり玉ふを祈るの外更に餘念無し、若し後日に至り和尙退轉の心生ずる時ありしならば、妾が宣誓の志を懷ひ玉へ」と、件の黑髮を和尙に渡した。和尙は深く其言葉に感じて、直ちに修業の鹿島立、日夜怠りなく參禪勉道し、遂に大事了畢の印可を得られた。女もまた和尙に別れてより、人里離れし處に形ばかりの庵室を結びて、一生靜かに世を送つたと云ふ事である、發心正しからざれば萬行空しと、和尙の發心もさること乍ら、女子の宣誓の如何にも奧床しい事てはないか。

蚊子の飽くに任せし愚堂國師

愚堂國師と言へば禪門近代の高德であつて、誰れ知らぬ者もないが、其修業中の刻苦精勵と來ては、迚も近時の如く怠慢に流れつゝある禪客の想像にだも及ばぬ所である。また心膽をして寒からしむる事が實に多々あるのである。師が嘗つて、禪を花園に修するの時、或る夏の夕、院後の竹林中に端坐工夫して居ると、多くの蚊子が是れ幸ひと澤山集つて來て、思ふ存分に、顏と云はず、頭と云はず、ぶん〳〵刺し盡したのである、師はそんな事には少しも頓着せずに、一心不亂に工夫三昧に夜を明かした。さあ朝になつて見ると誠にかず限りも無い澤山の蚊子が血に飽いて、ごろり〳〵と桝に量る程死んで居たと云ふが、今の世の人々は、之を聞いて、少しく修行の心事に省る所がなくてはなるまい。

慈門尼の偉大なる感化

昔、江州彦根の藩士たりし武居某と云ふ者に一人の娘があつた、此娘人世の常無き

ことを感じて、身を佛門に投じ名を慈門と改めた。慈門の薙染せしは享保二年の春四月、番茶も出花の十八てあつたが、今其動機は暫く措き、慈門の心情の發露せし一佳話を傳へたい。禪尼は至つて仁慈の心厚く、又清らかなる信念は折にふれ處に隨うて多くの人を感化したのてあるが後世に傳へられて居る美談の一節、

或る年冬の寒き夜に、一人の盜賊禪尼の庵に入り來りて財物を求めた。此の時禪尼は少しも騷げる氣色もなくその賊に告げて言はるゝには「かゝる寒き夜に野を越え、山を越へて態々の御來訪、何か暖きものをこしらへて進ぜ參らする程に暫くの間お待ち下され」と言うて、粥を煮て與へ火の用意をも充分に整へて、然る後に盜賊に向つて云ふ樣、「自分は世を捨てたる身の上なれば價のあるものとては更にないが、子が望む處のものは何なりと皆悉く携へ行かれよ、其かはりに子に望む事がある、自分が今つく〴〵と子を見るのに、如何なる業を營みても世渡りするには困難ならぬその體格、然るにかゝる淺間しき、量見を起すと云ふことは、自分は云ふも更なり、定めて子の父母や、兄弟姉妹は如何程嘆き居るか分りませぬ、庵内の財物は殘らず子に遣す程に、それを資本として正しき道を守り、一日も早く己れの心の麗はしきことを悟るやうにせよ」と、いと懇ろに諭しければ、賊は禪尼の餘りの慈心深きに感泣して遂に本心に立ちかへり、一物をも取らずして今より改心すべき事を誓ふてそこを去りしと。

「慈悲の眼に憎しと思ふものぞなき罪ある身こそ猶可憐けれ」禪尼の熱烈なる信念と溢るゝ如き慈悲心とは、宗敎家の態度として佛祖も後に撞着せしむるではないか。

環溪和尙神官の膽を奪ふ

洞門作家の漢として其の名を知られたる環溪和尙は、從一位久我建通の義子と云ふので久我氏と稱して居た。當時神佛二宗合して大敎院なるものを設けた事がある、其の事務は神官と僧侶とが輪番交代にて惣括する事となつた。其時分に偶々和尙が輪番の管長てあつた、或日、神官某が日頃和尙の非凡にして學德あることを聞いて居たの

て、今日こそ和尚を一つやり困め吳れんと云ふ野心、白分等同志互に相談して和尚に語るやう、「神社の祭典に方りては、僧侶が法衣を着し、珠數をつまぐりて死したる魚鳥を捧ぐると云ふことは實に見苦しい、かゝる時には僧侶も矢張り、烏帽子、直垂にて、神官と同樣にして貰ひたい」と言うと、和尚答へて曰く「それは誠に面白い事ぢや、僧侶は、死人にさへ、手を觸るゝが常、死したる魚鳥を捧ぐる位の事は左程不思議の話でもない、また、烏帽子も被れば直垂も着る、其かわりに、子等が寺へ來られたる時には、髮を剃りおとして坊主頭となり、法衣を着て僧侶の儀式に隨はれよ」と、和尚神官等大に閉口して、「矢張り坊さんは坊さんらしいに限ります」とは頗る滑稽。和尚元來擊石火裏に緇素を別ち、閃電光中に殺活を辨ずる活衲僧、明治初年敎界の波瀾に盡されたる功績は多大なものである。

禪は大小の數を絕す

豐臣秀吉が全盛時代、一日徒然のあまり志津三郎兼氏の太刀を賭けて、天地間に此上もないと云ふ大きなものを三十一文字に綴れとの仰せ、第一に横紙破りと言はれたる福島正則が

五畿內に蔓る程の梅の木に
天地にひゞく鶯の聲

秀吉中々承知しない、今度は加藤清正がのさばり出て。

富士山を枕になして寢て見れば
足は松前蝦夷へとどかん

とやつた、秀吉大いに感じて正に刀を取らせんとする一剎那、大谷吉隆御前に進み

須彌山に腰打掛けて大空を
笠に被れど耳はかくれず

すると、佐和山の狸と言はれた石田三成、負けぬ氣で

天と地を團子に丸め一呑みに
　　呑めども咽喉へ觸らざりけり

太刀は忽ちに三成へ下されんとする、其時曾呂利新左衛門は

天と地を團子に丸め呑む奴を
　　睫の先て突き飛ばしけり

と詠んて、古今の名刀を拜領したと云ふ話てある。極大は極小に通ず、禪は必竟大小の量を絶したる端的、漫りに文字言句の葛藤に捉縛さるゝとなく、佛邊祖邊の熱氣熱慢を離れ、有句無句を超越して初めて斯道の關門に得るとが出來るのだ。

祖師の西來意と柏の樹

菩提達磨と云ふのは天竺即ち今の印度から支那へ禪宗を傳へた印度の和尙さん、夫れ故に支那の禪家は菩提達磨のことを祖師と申して居る。また印度より西の支那へ渡來した事を一口に西來と申す。處で玆に趙州と云ふ有名な禪僧が在つて、或る時一人の禪僧が此の趙州の處へやつて來て、例の問答を持ちかけた……聲高々と。

「如何なるか是れ祖師西來意？」

是れは「祖師の達磨が西來して支那に渡つたのは如何なる意味からてせう、何の目的あつて支那に來りしや」と云ふ質問である。趙州和尙即座に答へた。

「庭前の柏樹子」

是れは、庭前の柏の樹」と云ふ答へてある、何の事だかさつぱり解らぬ「如何なるか是れ祖師西來意」「庭前の柏の樹」愈々以て解らぬ、更に解らぬ。一寸も解らぬ。夫れも其の筈、此の問答を解せんとして、古來幾多の禪僧は腦味噌をしぼつたものだ、今し尙參禪の客は多く此の問答のために苦心して居る、私には半分ばかり解つて居るが……云ふまい〱、口を開けば已に第二第三、云はぬが花の芳野山。

密夫の名を得し曇華和尚

籌を帷幄に運し、勝を千里に決する者は、目前の小事には無頓着である、とは云へ身に覺えなき濡衣の乾す由もなき汚名に甘んずると云ふとは、元より尋常底の茶飯事てはない。

曇華和尚は豐後の人、幼にして臼杵の月桂寺鐵舆和尚の門に參じて、向上の關捩子を透過した。後に美濃に到つて、請はるゝ儘に其地の荒頽見る影もなき寺院を再興して、其處に住し、接化度生大ひに法筵を賑して居つたのである。

然るに近憐幾多ある信徒の家に一人の窈窕たる美人があつた。偶々村の青年と人目を忍ぶ、割なき中となつた。終に懷胎して玉の如き男の子を擧げた。父は怒つて娘を攻め、青年の名を問へば、意外にも名望四邊に隱れなき曇華和尚の情の種と白狀したのである。其一語を聞くや、父は憤然として其子を抱ひて寺に來た、和尚の姿を見ると突然、此賣僧奴がよくも人の娘を疵物にして呉れた……」と言ふたまゝ件の赤兒を和尚の面前に投付て歸り去つたのである。

和尚は無言の儘、件の赤兒を衣の袖に抱き取つて、破顏一番「何か仔細があるだらう！」と獨語し乍ら、爾來飴を含ましめたり、貰ひ乳をしたり、雨風雨の其中を刻苦精勵、只管に其子を養育して居る。

其有様を眺めた附近の誰彼、惡口雜言罵詈嘲笑、和尚の四邊は俄に秋風落莫の觀がある。和尚は一向氣に介せず、唯々子供の成長を樂しむが如き樣子に、飜然として前非を悔ゆるに至つた赤兒の母、ありし次第を包まず隱さず父に懺悔して和尚に詫を依賴したのである。

和尚は夫を聞いて「此子の眞の父が分つたのか」と云ふたまゝ、何の咎めもなく子供を無造作に渡された、其態度、千聖も亦摸索不著、爾來近郊の信者傳へ聞いて、益益和尚の法德を稱へぬものがなかつたと云ふことである。往古の白隱禪師の逸話にも

似て、一層ゆかしい事ではないか。

句に「田の草を取つて其儘肥料かな」と、禪の本分底より見來れば、元來除くべき煩惱もなければ、掃ふべき塵埃もない。佛と云ふも凡夫と云ふも元是れ一念の轉處によつて分るゝのである。

放蕩無賴の平四郎

玆に面白きは、白隱下の居士として有名なる山梨平四郎が發心の動機である。彼の前半生は非常なる放蕩無賴、凡そ世に在る馬鹿の限りを盡したが、一日何と思ふたものか、自分の菩提所なる近所の寺に遊びに行つた。すると和尚の云はるゝには「お前も際限なく道樂ばかりして居らいで、少しは未來の事でも考へては什麼ぢや」と、平四郎身にとりては、あまりの奇特事、所詮針劄不入の漢と思ひきや、平四郎ひどく感に入つたものと見えて「和尚さん夫てはどうしたら宜からう」と頗る眞面目の問に、和尚は「左樣サ、彼の吉原山の瀧の邊に不動尊でも建立したがよからう」と云ふと、平四郎は直ちに一體の不動尊を瀧の畔に寄進した。其時ドヽッと落ちては石に碎ける大波小波、碧潭となつては下流に消える瀧津瀨の、又同じ調子に落下幾十丈、水沫巖に碎けてパッと散り布く眞珠白珠、水の行末をつく〴〵と眺めて居つたが、突嗟の間に何を感じたものか家に歸つて浴場に閉ぢ籠り、兀々として坐定三昧に入つたのてある。

丁度この時、村に本山よりの巡回布敎があつて、平四郎は夫を聞に行つた。布敎師は澤水和尚の法語を引いて話されたが、それは有名な句で「勇猛の衆生の爲めには成佛一念頭にあり、懈怠の衆生の爲には、涅槃三祇に捗る」と云ふのである。平四郎この一句を聞き、奮然として再び定に入り、遂に薩陀嶺を越えて白隱禪師の會下に參じた、爾來勇猛精進の努力は終に這箇の大事を了畢して、涅槃寂靜の境に達することが出來たとの事てある。

放屁の上手な默雷和尚

和尚一日圓山の絲垂櫻を一見したが、歸つて侍者に云はるゝには、其花見客の仰山なこと、何故コンナ櫻花の爲めに滿都の士女が斯くも狂奔するのか實に馬鹿な奴であると思ふた、櫻花は未だしも錢儲けをするから怜悧いが之に浮かるゝ人間は馬鹿の骨頂である、高台寺の政所にも立派な絲垂櫻もあれば深山の奥にも櫻花か咲いて居る、それに唯だ一本の此圓山の絲垂櫻に狂奔するのは何れ祇園の解語花に戯れたいからであらう、それで衲は昨日圓山から祇園へかけての花見客を小口から睥睨して歩いた、而して彼の一力の門てブッと大きな屁を放つ時の快よさ、百萬の花見客が此屁の爲めに吹きとばされる程の氣持がした、今晩でも行つて見よ、絲垂櫻の花に衲の屁の匂ひがするぞ。

「屁なりとて仇に思ふな諸人よブッと云ふのは佛なりけり」と云ふ古徳の和歌もある「百日說法屁一つ」と云ふのは、釋迦が最後に空理を說かれた、即ち說不說の妙處を指すのてある。衲の花見客を吹き飛ばした放屁も亦釋迦傳來の放屁て、旅順陷落の時の高臺寺の祝砲以上の大音響があるよアハ……。

白隱の鼾聲船內を驚かす

機位を離れずんば、毒海に墮在す、語群を驚さずんば流俗に陷ると、白隱禪師が未だ二十三歲の雲水時代、所々師を訪ね道を問ふて兵庫より船に乘つたことがある。其夜は月明晝の如く金波閃めく風景を賞てつゝ、何事の間にか禪師は鼾聲雷の如く熟睡して了ふた。暫くして眼を覺せば船は依爲として動かない、禪師は寢眼を擦りながら「オイ船頭さん、まだ船を出さないのか、何時迄何をして居るのだ」と云へば、船頭は大ひに立腹して「ヤイこの寢惚助奴何を云つて居るんだ、昨夜兵庫から十數艘の船は、難風に逢つて大方轉覆して了つて、船頭も客も今頃は鯨の餌食だ、幸に此船ばか

り、お客樣が一生懸命に神佛を念じたので漸く助かつたので、お前はそれも知らずにグー〳〵寐て了つて居るとは、をいら今まで二三十年この家業をして居るが、お前のやうな大膽な坊主は見たことも聞いたこともない！」と怒鳴付けられ、禪師は「おゝ左樣か、更に知らなかつたよ」と左右を見ると、乘客一同まだ餘暈に惱まされて半死半生の體である。船頭の呆れたのも無理はないと思はれた。

この一例によつても禪師の胸中は何時も光風霽月、隨所に蓋天蓋地の活三昧あることが分る、必竟氣海丹田から練上つた禪修の力によつて、生死岸頭無念無想の境涯に達したるものでなければ斯うはゆくまい。

雲門は泥棒の親玉

支那四百餘州の建化門中に覇權を握り、一機一境に不世出の鋭鋒を現はされし雲門和尙、一日、其道にかけては中々の古狸、脚下線絕えて百自由底の活三昧に住して居る乾峯老漢の室を訪ふて斯道の玄底を叩いた。然るに其歸路の挨拶が振つて居る、只一言、

「候白更有₂候黑在₁」

これは「淮海集」廿五卷目の故事であるが、昔、閩の國に候白と云ふスリ泥棒があつて、人の物をスリ取る事に妙を得て居る。或日彼は女の候黑と云ふものに不圖途中で出會した、ところで黑が白を欺かうと考へて、特更井戶の側に據り、僞つて何か井戶の中に落した樣な振をして居る。そこで白はこれを怪しみ「お前さんは何故に井戶の中を覗いて居るのぢや」と問ふと「妾は一寸この井戶で水鏡を見て居ました所が、誤つて珥を井戶の中に墜しました、實は非常な高價のもので、誠に惜しくて堪りませぬ、けれど女の身で井の中に入るともならず、途方に呉れて居るところです」と如何樣眞實らしく述べると、白は「夫は氣の毒千萬、私か拾うて遣らう」と實は相手は女であるし、眞逆嘘は云ふまい、時によると有つても無い振を仕樣と云ふ考。衣服を井

戸側に脫ぎ、眞裸になつて、ソロ〳〵と井戸の中に下りた。この樣子を見た女の候黒は、策や方れると思ふたてあらう、白の衣服をば殘らず持つて、有難う！とも何とも云はずに飛電の如くに跡を昧まして了うた。耳を落したと云はれて井戸の中に入つた候白こそ善い顏の皮と言はねばならぬ。今雲門はこの故事を引いて、自分は天晴スリの頭、泥棒の親玉かと思へば、こりや大泥棒に出合つた哩、須彌に上るも天の在るありて少しも油斷はならぬ、と言葉は荒いが禪の上ては敬語てある。兩重の關に迷ふた事もない近時の禪僧には雲門の胸中は分らぬてあらう。

骨まで食つた梅痴和尚

梅痴和尚は淨土門の人てあるが、頗る禪機があつた。梅を愛すると深く自ら梅痴と稱して居た、詩佛。五山等と風流の交をなし、小野湖山、大沼枕山等を打出した近代の偉僧てあるが、曾つて飯沼の弘經寺に住して居つた頃、官寺の事とて伽藍普請に際し幕府より吏員が派出して工事の監督をして居つたのてある。一日幕吏の一人が俄かに和尚に謁を乞ひ出た、何事ならんと直ちに面會すると「只今庫裡の床下を檢査せしに、魚骨散亂して狼籍を極めて居る、こは必ずや山內に破戒の僧侶が居るに相違ない、直ちに詰問して罪を幕府に問へ！」と息まけば、和尚破顏一番、聲を和げて「あゝ今時の小僧共は役にたゝぬものぢや、老僧の若い頃は魚の骨や頭は殘らず食つて了ふたのに……」と云はれたので、流石の幕吏も呆然として爲す處を知らず、去いて官所に件の事を上申したが、上官亦笑つて、敢て罪に問はなかつたので、別に何事もなく其塲は過ぎたが、後に和尚は竊かに大衆を呼び寄せて言はるゝには「衲はこの年になつて、誠に忌はしき事を口にして汝等を救ふたのぢや、汝等もしも良心があるならば悔悟して再び犯すなよ」と恰も慈母の赤子に對するが如き樣子、淚を垂れて喩したのて、座にある破戒の僧は慟哭して罪を謝し爾後決して不作法のことは致さじと誓つたとのとてある。誠にゆかしい逸事てはないか。

壯快なる蘆津實全

江州永源寺に遊ぶものは、多く一葉落ち初むる天下の秋、滿山錦を織るが如き紅葉見の期を選ぶであらうが、師は老人と壯者との區別なく、男と女との差別を論ぜず、いつも壯快なる態度で凡ての形式を抛つて、一點の脂粉を飾らず面會を許しては、禪の話を聽かせるが常である。乍併、師は非常に苦學をした人であつて、最初に天台宗に學び、後轉宗して禪門に入つた、されば人に向つても向上の一路を辿る用意として「紅葉を見ながら坐禪の修行が出來れば結構ぢやがの」と言はれる、師には四季の眺望に眩惑せられず、寧ろ雪中を踏破して其門を叩いたなら、一層その見解の全體を窺ふことが出來やうと思ふ。

繪畫三昧の兆殿子

畫を以て一世を風靡せし、彼の有名なる兆殿司は其の名を明兆と云ひ、殿司は役の名である、彼は淡路國物部村の產、出家して東福寺の大道禪師について弟子となつたのである。天資畫を好みて、朝三暮四之れを廢することなく掌に何物かを畫いて喜んで居る禪師は每に之を戒めて「若し畫を廢することが出來なければ師弟の緣を絕つて放逐して了ふ」と云はれ、明兆小僧大に感じて思ふやう彼の道路に棄てゝあるものは敝履である。然るに我今若し大道禪師に棄てられたならば、何ぞ敝履と異る處がないと、自ら號して、破草鞋赤脚子と言つて居た。

或日禪師の不在を幸に、圖らず筆を取りて不動尊を書き出した、專心一意更に餘念なく殆ど半日を費した、熱心の余り禪師の歸山せし事を更に知らなかつた。禪師は明兆小僧が見えぬ故、何處に居るかと思つて探して見ると、小僧一室を閉ぢて、頻りに不動尊を畫いて居つたが。禪師の歸り來りしを見て直ちに其畫を取つて膝下に隱し、知らぬ風をして居つた。然るに禪師は不圖見ると明兆の膝下より光明輝々として放つ

て居るのを認めて大に驚き明兆を押除けて見れば、こは勿體なや見事なる不動尊の畵像である、其妙技の神に入るに感じて、夫れより又畵事を妨げぬ樣になつた。

時の將軍たりし足利義持は深く明兆を愛し、或る時其の欲する所を聞いた事がある、明兆答へて曰く「衲は財寶は決して望まない、又官爵も不要」、一衣一鉢を以て充分てある、然し衲の願ふ所は只一つある、それは外でもないが、當寺境内に多くの櫻樹を栽えてあるが定めて後年に至り精舍變じて遊宴の塲となるてあらう、之が衲の深く悲歎する所である、何卒速かに命を下して伐らせて戴きたい」と義持は大に其志に感じ直ちに櫻樹を悉く伐らした。

又明兆西海に遊歴したことがある。其時思ふやう、東福寺の如き巨刹に、昔より涅槃像のなきは、實に遺憾のことてある。自ら海を航して彼の地に到り、肖像をば模寫し來らんと、早速旅裝して稻荷橋まで來りし處に、一人の老僧在りて、「子は何處に行くのてあるか」との問ひ、明兆は一々實を以て告げると、「我は曾て其事を知れり」と云ふて、某旅亭に連れ行き、一軸を出して示して曰く「是れ即ち佛涅槃の像てある、我子の志を憐みて、遠く滄海萬里を航りて持ち來りしなり」と其軸を授けて、漂然として其亭を出て何處ともなく去つて仕舞うた。明兆は大に喜んて之を携へて歸り、模寫せんと欲したるも、素より貧しくして、一厘の貯へとてある可き筈もなければ、即ち寺の側なる河原に行き、五色の石を拾ひて之を磨して彩色となし遂に一本を寫して本堂に納めた。それは縱實に三丈九尺、横二丈六尺と云ふ大軸てあつて、佛の入滅、羅漢の泣哭、鳥獸虫魚の悲嘆する所の狀、恰も眞を見るが如くてある。

包の中は小判三百兩

品川海晏寺の慈光和尙は學德兼備の老知識てあつた。其無欲なる生涯は實に禪僧好個の典型、幾多の信者よりは生佛の如くに渇仰されたのてある。人天の度生は衲家の本分とは申乍ら、和尙の德化は禽獸に及び、爲に計らざる財施を得るに至つた。今の

世には珍らしき一場の話柄。けれども漫りに之を摸せんと欲する有財餓鬼あらば、往昔の舜若多にも似て彈指すべきである。

頃は廢佛毀釋と騷ぎ廻つた明治の初年、官寺祿寺と巾を利した榮華の夢も覺め果てゝ、七堂伽藍に腥風漲る、流石の海晏寺も見る影もなき有樣となつた。時の住職たる慈光和尚は或日傾きかけたる緣先に出てゝ、折柄到來した法事菓子を賞味しつゝ番茶を啜つて、寺門の興隆を考へて居た。折しも彼方の藪より一匹の野狐現れ、のそりのそりと和尚の側へやつて來た。和尚は件の狐に菓子の一片を投げやつて「お前も元來佛性があつて、寺の境內た住んで居るのに、世の中が斯くも物騷ては定めし困るだらう、衲も今は殆んど食ふ米もなくなつた、自分の困るのは一向厭はぬが、寺門の荒廢は何より辛い、此處て二三百兩の金があれば、お前にも御馳走を上げるがナ」と覺えず狐に愚痴を幷べた。すると翌日の夕刻、一人の旅人が飄然海晏寺へ入つて來て云うには「私は遠方より初めて江戶へ參つた者、御覽の如き小荷物てはありまするが、何分邪魔て困りまするにより、何卒御邪魔乍ら兩三日お預りを願ひたい」との事に、元來洒脫な慈光和尚「それはいと易い事、置いてお出なさい」と早速承知した。件の老爺は背にした小包を置いて、何分宜敷賴みます」と又飄然と門を出た。爾來、何うした事やら三日經ち五日經つても取りに來ぬ、その月も過ぎ去り翌月も過ぎた。和尚不思議に思ひ、件の風呂敷包を開き見ると、こはそも如何に、中より現れたるは見るも眩き黃金三百兩、之は〳〵と驚き果てた和尚は、早速奉行所へ持參して事の始終を訴へた。然るに其後滿一ヶ年、預け主は依然として不明と云ふので、三百兩の金は其儘和尚へと還つて來た。思へば過ぎし日、緣先に於て愚痴を幷べた野狐の仕業かと、流石の和尚も薄氣味惡く思つたか惡か、兎に角其金て內外の修繕滯りなく出來致したとの事である。

三好物外の心膽修鍊

學問によつてのみ人格は向上する譯のものではない、常に心膽を鍊磨して安住不動白刄頭上に下るも、泰山目前に崩るゝも惑亂なく、顚倒なく自若たる覺悟がなくてはならぬとの見地より、倫理の時間には必ず十分間の靜坐を生徒に勵行せしむるので、有名なる仙臺第二高等學校長物外居士三好愛吉氏、常に志を此處に傾けて所有佛典祖錄を研磨し、少閑を得れば兀々として斯の非思量底を思量する、隨つて其風采亦非凡、黑の綿服に黑の袴、自ら下駄を出して短軀を高等學校へと運ばれる、而も自分は禪僧になり兼ねたから、一子は必ず出家せしめんとの大願、既に師子の約をも成立したと云ふ事である。

近頃氏に妙な噂が起つた。开は高等學校の首席教授なる粟野健次郎君、元來禪機潑溂たる豪酒家であるが、物外校長の心膽修鍊には聊かあてられ氣味、折があらば校長殿の度膽を試みんと待構へて居た矢先、丁度二人は連立つて某地へ旅行することになつた。其夜旅舍に着いて一風呂浴びやうと、二人は赤裸々の儘浴槽に入る、やがて三好氏の上るのを待ち構へて居た粟野先生、こゝぞとばかり突如氏の後方に垂れ下つた睾丸をばイヤと云ふ程握り緊めた「痛い！」「何だ睾丸如き、泰山吾前に崩るゝとも……ぢやないか」眞僞の程は保證の限りに非ず、併し乍ら痛くなかつたら大變、石ぢやあるまいしと言ふたが恁うか。

良寛禪師と龜田鵬齋

良寛禪師一生の事蹟を視、其の歌集なぞを繙いて見ると些しも造作に渡つたる所は無い、例せば

やまさゝにあられたばしるおとは
さら〳〵とせしこゝろこそよけれ

斯の如く任運無作にして凡俗を超絕せる所に天下の豪傑は感服したのである、當時越後西蒲原に某者あり、龜田鵬齋の書に巧みなるを知り一日先生を招して屛風に揮毫を

賴んだ、元來高慢なる先生予にあらざれば誰れか能く書せんと自任して早速請合つた。軈て其家に至り凛々たる威風を以て揮毫に着手し、丁度半ばに達せし時、偶ま御晝飯をとの事に、其儘筆を止めて別席に至り、晝飯後座敷に立還り見れば、これそも如何に殘せし半分が見事なる筆蹟にて既に揮毫は出來上つて居る。先生は大に驚き且つ怒りて曰く「誰か此れを書せしものぞ」と、其時庭に見る影もなき一貧僧の在る有りて「夫は拙衲が書き加へたのぢや」との答に、よく〳〵見れば豫て見覺ある良寛和尚である。鵬齋の高慢心は於是全く挫け、其後、自ら言ふやう「われ良寛に逢うてより書風全く一變せり」と、而して今猶ほ其の屛風は西蒲原の某家に秘藏されて有る、偖て此の一貧僧良寛禪師には自己と云ふ固結せる所はない、又禪僧と云ふ臭味もない、然し彼れはその間に昧ます能はざる天眞の光りを放つて天下の偉丈夫を屈服するの力となつたのである。

馬上に人なく鞍下に馬なし

昔し徳川三代將軍より非常なる崇拜を享けたる彼の有名なる澤庵和尚、始めは箱根の山中に庵を結んで居たが、其時屢々將軍より江戸に來るべきやう特に使を遣はされしに對して和尚は一向平氣「おへどゝ聞けばむさしきたなし」と言つて、容易に應ぜられなかつた。爾來數回將軍の懇情默し難く、止むなく江戸に上り、非常に將軍の歸依を受けたのである。

一日柳生但馬守が愛宕山の石段を上から馬に乘つた儘下らんとして下る能はざるをフト見て取つた澤庵和尚「卿は未だ馬に乘つて居るとか、萬一落馬して過失をするとか云ふ考へを持つて居るから甘く往かぬ、即ち鞍上に人無く鞍下に馬無しと云ふ虛通自在の境に入らねば其坂は下れぬ」と、敎示した。その一言を聞いて一鞭の下に石段を降つたと云ふ事は人口に會炙して居る、凡て竹刀を持て擊劍をやつても同じく心を

手に寄すれば足が御留守になり、心を胴に寄すれば臂鎧の方が御留守にて、常に神通自在の働をなすこと能はず、依て虚心自在の域にあれば、ヤッと聲を懸けて敵に向つたる瞬間にも全身間隙はない、故に何れの方面からも打込む事は出來ない、然るに世間の人々は此の理を知らないものであるから、竹刀を手にすれば竹刀に心を奪れ、法律を學べば法律に心を奪はれ、外國語を研究すれば其の方に於て心を奪はれ、一つも自在なる活動が出來ぬのである。

法衣に赤兒を抱く白隱和尚

白隱禪師或時隨徒に提唱をして居ると、庭の方よりカタ〳〵と人の急ぎくる足音が聞えたかと思ふと、本堂正面の障子を打ち開き入つて來たものがある、ヒョイと見ると門前の酒屋の親爺、懷には生れて間もなき赤兒を抱き、禪師の顏を見るや否や「此の賣僧坊主め、よくも〳〵一人の大切な娘を疵者にして吳れたな、さあこんな狸坊主の子はけがらわしいから伴れて來たのだ受取れ」と罵詈雜言、禪師は一寸小首を傾け居りしが、つか〳〵と高座より降り來て「あゝ左樣かどうも濟まんかつた」とその赤兒を受け取つた。

此の有樣を見た多くの隨徒等は非常に驚き異逆にかゝる事はあるまじと思ひ居りしが、兒を受け取る處を見ると更に意外、然し實際とすれば眞に佛祖の仇、斯る狸坊主の處に居つてもつまらん事と、早速袈裟行李をからげて皆な立ち去つて仕舞た。さしも大きな廣い御寺も小供の泣き聲ばかり、禪師の禿頭が見えるのみて淋しくなつてしまつた。禪師は每日の樣に小供を背に負ふては、貰ひ乳をして育てゝゐるのである。頃しも十二月の末頃、卍字巴と降る雪に、禪師は小供を法衣の袖に抱いて托鉢からの歸り途、件の酒屋の前に差しかゝると、炬燵に入つて裁縫してゐた此家の娘、此の有樣を見るや一念懺悔の情に充ち、恰も狂人の如く表に飛び出して來て、禪師の法衣の袖に取り縋り「禪師樣、甚だ相濟まぬことを致しました、何卒御許し下さい」と、

淚を流して何ごとをか斷つてゐるのを見た親爺、「之れあれ程云つて聞せて置たのに未だ未練があるのか」「いゑお父さん、よく聞いて下さい、此子は禪師樣の子だと申しましたが、實は隣家の久さんの子です、妾も惡いことゝは知つて居りましたが久さんの子だと云ひますれば、豫ねて嚴格なお父さんてあります故、どんなに怒られるかも知らんと思ひ、それが辛さに如何したとかと思案の結果、常にあなたが禪師樣を信仰して居なさる處から、禪師樣の子だと云つたならば御怒りもあるまいと女心の淺墓にもつい心もないことを申すました、御父さん禪師樣に御詫を申上て下さい」と云ふ、驚いたのは親爺てある、額を大地に押し當て謝罪すると、禪師は濟ましたもの「あゝさうだつたか私もそれて、どうやら譯が解つた、それなら返すよ」と赤兒を渡して更に禪師は「まあ出來て了ふた事は致し方もないから爺さんもそんなに怒らずに、其久さんとか云ふのを養子に迎へて此家を相續さしては呉れまいか」と狸坊主と云はれた禪師は今は却つて酒家の爲め行末の幸福を思つて、萬事圓滿に取計られしと言ふ事である。

美人に擁せられし水戶黃門

「正當にかゝる時如何」と、窈窕たる美人に抱き付かれ「枯木寒巖に依る暖氣一點も無し」と力むだけでは何となく無理がある。古より女色を好むものは獨り英雄のみに非ず、之に溺るゝものは單に自然主義の學生のみてはない。今茲に說かんとする水戶黃門光圀卿は、燃ゆるが如き靑春時代幾多の女難に相遇しつゝ、よく修養の道程を辿られたる一事のみに於ても、如何に賢君なりしかを知り得るのてある。黃門卿は家康の子賴房卿を父とし、寬永五年六月十日の誕生であつて、母君は谷左馬助藤原重則と云ふ人の娘であるが、卿は生れながらにして非常に美男子であつた。隨つて外出の時などは男色流行の世のことゝて、それ水戶の若殿がお通りなさるといつては目の保養に見物され、又女子供にも騷がれたらしく思はれる、曾つてはある比丘尼から思指をされたことすらあつた。

斯樣な美男であるから色々な戀話もあつたらうが、中にも黄門卿の御祖父樣なる家康公の妾に正木氏養珠院と云ふ方がある、紀州頼宣卿と水戸頼房卿との御實母てあるから卿には實の御祖母樣、故に卿も時々養珠院には遊びに行かれた所が頼宣卿の娘に松姫と云ふ絕世の美人、黄門卿とは從姝同志の事とて子供の時から一所に遊ばれたが、燃ゆるが如き靑春の時代、早くも卿の美男なるに戀慕の情を起して自然穗に現はるゝと云ふ有樣、そこて養珠院も雙方共に可愛き御孫のこと、どうぞ松姬の願をかなへて夫婦にしてやりたい事と御召し、頼房卿も薄々其心は御ありなされた樣てある。然し御三家相互の婚禮は幕府の禁制、そは勢力ある家門が婚姻を連ねては萬一の時に幕府も困るからてある。されば二人が一所になれば、梅が香を櫻に添へた樣な美しい夫婦は出來やうが、それが出來ない。それて養珠院は兩人共どうぞ戀中になればよい、さすれば出來た事だから仕方がないと云ふのを口實にして一所にしてやらうと云ふ服案、局老女などへも申含めては多少兩人をそゝのかすと云ふ風てあつた。黄門卿元より木石の如き無情漢てはない、松姬の艷かなる風姿養珠院の親情、共に其色を覺つた。然し黄門卿は此時既に修養の階程に向つて步を運びつゝあつたので、幾度か遣る情をば、讀書によつて押沈め、同性娶らずと云ふ事を心に誓つたのである。

ある年の春、櫻に霞む黄昏時を、この花の如き十八九歲の美少年黄門卿が、養珠院の庭の隅なる番神堂の中に入り、一人書見をして居られると、堂外衣摺れの音して誰か入來る氣配、フト見る其處には窈窕たる美人が立つて居る。卿は屹然と「松姬樣は今頃何しに御出なされた」姬は耻しさうに「局は居りませぬか、それなら後から來るてござりませう」と云ひながら、卿の書見をして居る堂の中へ入つて來た。恰も花を見出した胡蝶の姿「御書見のみなされては御身體の害、ちと御話を聞かして下さいませ」と優しき乍らも姬蔦の、離れともなき風情をば、黄門卿容を改め「今時分かゝる處へ御出になつてはなりませぬ」と云つて、番神堂を立つてしまはれた。

後年心越禪師に師事して精神修養を重ね國學の勃興を助け勤王の精神を鼓吹せられ

たる卿の青年時代はかくして克己の德を全うせられたのである。

後篇終り

附錄　塵中塵

甲斐の祖曉

『上』

世の開闢から斧を知らぬやうな、老杉古檜の欝蒼たる其中に、峨々として聳ゆる七堂伽藍は、加賀の名所に數へらるゝばかりではない、洞門稀有の古禪林で、大乘寺と其名を聞いてすら、初めて故郷を出た雲水等は震えあがる位。

頃は延寶五年秋九月、雲を銜いて半空に聳ゆる白山の絕嶺は幽に白く、石坂には紅葉の二片三片、女郎花の枯れ殘りも、葉ばかりな桔梗の莖も、風流男の眼には裾模樣と喜ぶだらう、されども瓢簞の葷酒は山門に入るを許さぬのだ。

見よ、黃昏を告ぐる墨染の衣の僧は、早くも鐘樓に上つて撞木を握つて居る、韻々と響き渡る鐘聲一打、颯々たる松吹く風と諸共に、今しも禪榻裡に居並んだる雲衲の胸底に泌み渡るのである。

明月松樹に懸つても、雁聲耳を劈くも、只これ心王を把捉せんと、端坐工夫を凝らして居る。

一會の衆僧が一百餘名、接得の大任に當つて居る師家は、月舟宗胡と呼ぶ大善知識て枯木寒巖に倚つたやうに、壇上眉白く默然と結跏三昧てこそあれ、一度握つた警策には、如何なる魔王も骨折れ、肉飛ぶの殺活自在な作略がある。法燈幽に輝くところ、今しも何事か口宣最中てある。

「座下の諸人、どうぢや、分つたかな、黃檗の千丈は吾宗を愚弄しとるのぢや、誰ぞ、彼が門頭に掲げた『曹洞滅却』の高額を奪却する底の活衲僧は居らぬかナ、」

一百餘人の一座、恰も水を打つたかのやう暫時寂寥として、たゞ水涕をすゝる音さへ殊更に響き渡る。

それも無理ならぬ筈、黃檗山萬福寺の門頭高く『曹洞滅却』の額を掲げた住職千丈老師は檗門の碩德、元これ一世の怪老漢、當時非常に衰頽した禪門に獅子吼の人を出さんため平常柱杖に代ふるに明煌々たる青龍の大薙刀を持つて、無眼子の衲僧ために切り倒さるゝ者、已に幾十人に及ぶと聞いて居る。

生死岸頭の住來はたとへ理窟に解つても、自分の生首を取られに往くやうなのは誰もすゝまない、たゞ默然と控へて居る者ばかり、月舟禪師氣色甚だ荒れて、

「咄！宗門の命脈より、自分の命が惜しいのかッ」

老禪師の胸中には、熱血が涌いて居る。

座は益々靜寂になつて來た。其時！

「乞ふ我に命ぜよ！」

一語、裂帛の響、遠く末座の方から起つた、何者ならんと衆僧愕然として首を廻らせば、こはそもいかに、端役の茶頭、生れは甲斐の國、祖曉と呼ぶ、十六歲の若僧てあつた。

一座百人、俄かに動搖めき出し、

「見よ、彼が狂顚の態を！」と罷參の一僧は唇を反らして笑ひ初めた。

「老僧の口宣に、ちと逆立てるんだよ、可哀想にさ！」

口には云ふたが、これも嘲りの色は隱しきれぬ、自分免許のお悟り自慢な「鵜呑み」と、あだ名せられてる氣早の僧。

「一體、生意氣極まるさ、無參の分際で」

「全くそうだよ、命知らず奴」

忽ちにして隅から隅、隣りから隣と罵詈嘲笑を浴びせるのである。

獨り、悠然と壇上に端坐せる月舟禪師は大喝一聲、衆僧の喧噪を言下に靜めて、さて徐ろに祖曉を呼んだ。

進み來るを待つて、只一語

「好箇の丈夫、往け！」

老禪師は、壇を下りて直樣歸寮せられた。

開枕の鐘は一山に響き渡つて、大衆も正に散堂したが、只ひとり、取殘されて冥想界に遊んだ十六歲の雛僧が胸中、恐らく三世の諸佛も窺ふことが出來ぬのであらう、聖僧前の燈は消えて、寒月冷かに窓を照して居る。

『中』

蛙鳴蟬噪にも等しき大衆の罵詈嘲笑には耳目も觸れず、曉天已に仕度を整へて、千丈勘破の鹿島立、祖曉は月舟禪師へ乞暇の拜を了へて、墨染の麻の衣の裳裾を高く、キリッを手巾にからげ、素足に古草鞋、下げた袈裟行李も邪魔さうに、瓢然と大乘門頭を出てんとした。

天いまだ曉げず、星光きらめくところ、門送の衆僧は早くも山門外に列伍整然として待つて居つたが、宗照と云ふ知客役の一僧携えたりし柱杖をば、祖曉の面前に衝立てゝ問話一番、

「闍梨、試みに千丈勘破の一句を道ひ見ん」

百名の雲衲は、片唾を呑んで、答へ如何にと眺めて居る。
幼き祖曉、細き腕を伸ぶるよと見る間に、滿身の力を一氣に籠めて、早くも柱杖を奪ひ取つた。
揚々三卓して答へて曰く
「看よ々々大千沙界の中、轉轆々阿轆々」
大千沙界は、只是れ祖曉の面目と云はぬばかり、悠々數歩、衆僧の間を通り過ぎんとするや、今度は五役寮の一なる維那の大麟和尚と云ふ老僧、手に網代笠を拈じて祖曉の面前に塞がり、
「作麼生か道へ、行脚の眼！」
言未だ終らざるに、飛上つて右の笠をも奪ひ取つた、取つた笠をば高く捧げて、
「這箇の一笠、蓋天蓋地！」
と叫んだまゝ、後をも見ずに意氣堂々と坂を下つたのである。

薄暗き松杉の下道を驀直に、とぼ〱と辿る雛僧が心の先は巳に黄檗山に屆いて居る。遠く馬士の姿なども見ゆる曉方の野の景色を眺め、枯れ殘りたる柴草を踏みながら、悠々歩を進めて行くほどに、山高うして水清き犀川の邊まで來た。
彼は橋の欄干に腰打掛けて、白浪逆巻く水の行末を眺めて居ると、突如、橋の下より現れ出てたる二個の怪物、咄嗟に祖曉の兩足を取るより早く、見るも眩むばかりな深谷を流るる川面に、吊して問ふて曰く、
「正當恁麼の時如何！」
吃驚仰天、巳に氣絶でもいたして居た筈の祖曉は、倒に吊されたまゝ、神色自若、平然として答へて曰く、
「白山雪漫々、犀河水濺々！」
彼の剛腹、正に天地を呑んで居る。
天晴れの好漢！」と、知らず驚愕の聲を放つた怪物とは誰ならぬ、師の命によつて

祖暁が行先を見屆けて間道より來て居つた、大乘寺の役僧、維那知客の二和尚てあつたのである。

「下」

祖暁は日を重ねて、黄檗山に辿り着いた。

成る程、聞きしに勝さる殿堂伽藍の峨々たる入口、山門の樓上には『曹洞滅却』の大額が墨黒々と掲げられてある。

祖暁は暫時、眉宇を動かして睥睨て居たが何んと思つたか、道の側に袈裟行李を卸して、双手にあまる大石を抱き上げ、吽んと一聲、力任せに高額眼がけて投げ付けた狙ひは誤たず額の中央に當つてザックとばかり碎けて落ちた、落ちた木片を小氣味よげにしばし眺めて今度は法によつて打板三下案内待つ間に己が穿いて來た古草鞋をば大奉書の紙に包みて二尺五寸の水引をかけ、千丈老師へ相見の進物として白木の三寶に載せたのである。

暫くすると、客行の僧が案内に來た、手磬の音に連られて趣く先は宏大なる殿堂の眞中、五侍者の外に十人の役僧が兩班位に威風嚴かに居并んで更に三十名の雲衲は前に控へて居る、須彌壇上を見上れば聞きしに違はず、千丈老漢は大薙刀を拄杖に替へ猛虎の如く眼光烱々として直立つて居る、一見誰か縮み上らぬものはあるまい。

祖暁は心の中に好箇の敵と思つたのてあらう、直ちに驀進せんとしたが兩班の僧が左右から遮つて一人々々進み出て、商量を試る。

然し祖暁の舌頭は一陣の秋風よりも鋭い、見る〳〵木の葉を落すやうに多くの役僧を言下に退けて、今はたゞ當の敵たる千丈老漢一人となつた。

例の白木の三寶を恭しく擎げて須彌壇上を見上げたが、鉢頭水も滴らんばかりの秋水の下に悠然と座具を展べ了つて拜一拜し、立てた大官香の煙ゆるやかに、縷々と上つては灰が落ちる、一寸消へ二寸消へ、三寸、五寸、どうした事やら、祖暁の頭は未だ上らぬ。二尺以上の線香が半ば以上、絶え果てゝも祖暁の身は少しも動かぬ。

さしもの千丈老漢、根悉き氣萎え、先づ開口一番、獅子吼のやう、
「汝が脚跟何に依つてか地を轉ぜざる？」
得たり賢しと語に應じ、咄嗟身を刎ね起したる祖曉、揚々座具を收めて曰く、
「某甲、法によつて只是の如し！」
千丈曰く
「作麼生か道へ、行脚の眼」
祖曉曰く、
「偏界曾つて藏さず」
時に千丈、高く拳頭を堅起して曰ふ、
「汝還つて會すや！」
祖曉、威を振つて、
「喝!!!」

と叫んだ。會下の僧五十名、悉く背に冷汗を覺えたてあらう！
千丈老漢、
「禮拜着――」と機勢を失つた。
祖曉直ちに
「始めて知る老和尚に此の機鋒あることを」
と言ひ捨てゝ此處を退かうとすると、千丈老漢、破顔微笑、徐々拂子を拈じて曰く、
「我に一法あり未だ曾て他に附屬せす、即ち今汝に附屬す」
と云ひながら、件の拂子を須彌壇上から、祖曉に度與すべく祖曉を目がけて拋擲されたのである。
而し、祖曉の眼中には、黄檗の積德千丈老師もなかつたらう！
度與された拂子を足の先にて受くるよと見えしが、間一髮を容れず、聲に應じていひける樣。

「是れ、何の破木杓ぞ、これ何の破草鞋ぞ」吽んと一聲聞くだにあら〳〵しく、拂子を壇上に蹴返された。流石、一世の怪傑とうたはれた千丈和尙を啞然たらしめて、紅顏の雛僧、甲斐の祖曉は凱歌高く、悠々と殿堂を退ける風貌は猛虎の寒月に嘯くにも似て定めし雄々しき事であつたらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『曹洞滅却』の割つた額をば、荒繩にくゝつて駄馬に負はせ、月舟禪師への土產物、大乘門頭さして、揚々と歸路に就く、茶頭の祖曉が、不敵の後姿！
鬼神ために泣き、天地山川、悉く祖曉の威儀堂々たるに感じたらん。松吹く風の音も讃歎の響きがあるのである。（36）

花の蕾の信善尼

『上』

霜に色づく紅葉の朝、雨に匂へる櫻の夕、一日として休みしことなく、靑山白水の間微かに聞ゆるは朗々たる讀經の聲と、淸絕哀婉なる誦念の響とである。此處、大和の國は、とある山の麓、見る影もなき草庵を結んで、親子四人が露をしのぐ假の宿。奧まりたる壇上には佛像を安置し、常燈ほの暗く光明十方を照さゞれども彼等四人が禮拜供養の至誠こそ、天神地祇をも感應せずには措かない決心！

そも個中の那人は誰？

頃は繼體天皇の十六年、南梁の歸化人なる司馬達親子が佛教宣布の目的にて海山萬里、異鄕の空の詫住居、思へ佛教公然の渡來に先だつこと當に三十年。桂を焚き玉を炊ぐとも、仇し野の草葉における露團々、朝風の誘ふがまゝに散りてくだけば榮華の夢は一夕に破れて跡なき人の世、よしこの理りは鵜呑に分明ても、さて斷ち難きは五欲の綱、去り難きが六塵の衢であるものを……彼れ、片々たる一介の司馬達、いかにうき世五十年の生涯を大束にくゝつて、み佛のために捧げしとは云へ、いとしき妻に

涙はなきか、將た可愛き兒等に血はなきか、而も交通の不便なる海洋、暴風怒濤を横切つて、言葉も通ぜぬ異郷の空に、一個人として大法宣布とは思ひ切つたる物好漢。いて彼れが大法に對する覺悟の程こそ見まほしきものぞ。さても當時我國内の狀態はいかゞてあつたらう。

「中」

繼體帝は大伴のかなむらによつて擁立せられ、皇后たしらか媛も大伴氏の手を勞して居る、隨つて其間に生れたるまがりのをほえ帝位を襲いて、安閑天皇と稱さるゝに至つて、帝は常に大伴を伯父と云つて百般の權勢を與へた。安閑帝崩じて嗣なく、皇弟をいしだて位についた、宣化帝即ちこれ、機を見るに敏なる大伴氏は已に物部一家の保てる武權すらも全く己が掌中に奪ひ取り、久しく遠ざかつて居た對韓政策に當らんとしたのである。先づ其の子いはとさてひこ等を遣はして、いはは筑紫に止まつて國政を執り、徵發に應じ、軍防を司り、さてひこは遙かに三韓に備へ、任那の日本府に往きて新羅を制せんとする。かくて內政外交文武の權は全く大伴氏に歸した。間もなく、宣化帝崩じて欽明帝の御代となるや、盛者必衰の理にもれず、大伴氏の權勢漸く衰へて、物部氏跋扈の時代となつたのである。

かくの如く大伴、物部二氏相爭ふ間に、獨り悠然として一方皇室に婚を通じ、一方權勢ある物部の女を娶りて根を上下に張り、他日の變を待つて居たのは蘇我氏である。かくて權威中外を傾けたる大伴氏は、其武權は物部氏のために剝がれ、其文權は蘇我氏のために奪はれて了ふた。乍併、木强なる武人の物部と、物馴れざる貴公子の蘇我一族とは到底對韓政策を行ふよしもなく一は保守を夢み、一は進歩の幻を追うて徒に各自の權勢を張るに日も猶足らぬ矢先、突如として佛敎傳來の聲を聞いた。時は欽明天皇の十三年、今を去る一千四百餘年の昔である。あはれ、文明の刺擊によつて、外國の事物に通曉せる蘇我氏の新思想と、外國の事情を知らず、三韓は我附庸たりと思ひ、徒に武人專權の昔を繰返さんとする物部氏の舊思想と新舊相異なれる二大潮流の

大渦中に捲き込まれたるは當時の佛教である。

自由廣濶なる進歩主義と、迂濶狹隘なる保守主義とが相反目して、國朝變革の氣運に向ひ、相對立して互に機會を窺うて居た矢先、徒に彼等の齒牙にかゝつて、私憤を慰せんとする道具に弄されし佛教の運命もまた危しと云ふべき哉。

『下』

頭はよしや圓頂の、墨染の衣は身に纏ふとも、袈裟吹く風の身體に感ずるからは、眼に黑白の色の視分るからは、腦漿に映ずる一切の妄念は去らず、況して寸斷々々に切つても碎いても、燐火の蒐まればまた一つに燃ゆるが、すべて子を思ふ親の愛情、うき世三十年の星霜を異郷の詫住居に送り了はせし司馬達。

今その愛娘、しま女を目前近く呼び寄せて何事をか說かんとする、

「……今更改めて言はずとも、我等が心身はすでにみ佛に捧げしもの、大法宣布の誓を立てゝより、數十年、今當に機緣熟せども我は老いの身の悲しさ、願ふは御身、父の志のを襲いて玆に出家となり、隨分、道心堅固に日を送らるゝやう……なき母への孝行之に過ぎたるはなし……」

時恰も夕月に光を添ふる卯の花垣の木下闇、堪へて見ても啼かねばならぬ杜鵑、八千八聲、言の葉は重ねずとも、伏眼勝なる娘を說く心の中は血を吐く思ひ――。

今は亡き母菩提のためと、早くも涙を納めて稚兒輪のしま女、今年やうやく十一歲可愛盛の花の蕾に閃めく剃刀、

流轉三界中。恩愛不能斷。棄恩入無爲。眞實報恩者。

かくて、我國最初の尼僧、善信尼とはしま女が稚兒姿の後身である。あゝ現世の熱情を除きて、御法の清涼を得むにはさても辛きもの……、この間欽明帝崩じて、敏達帝の御代となり滿朝の重臣、多くは佛教に歸依するやうになつた、帝また篤信を以て聞ゆ、令して六日に一回、放生會を實行せしめたのである彼の武名高かりし物部のをこしは死して輕躁なるもりや之に代り、蘇我氏にありては沈重なるいため死して驕豪な

るゝまで之に代つたので、禍機愈々熟し、國内今にも一變せんとする有樣、馬子は四方に使を發して佛道を修業する者を求めた。

高麗の慧便が播磨より迎へられて宮廷に入つたのも此時である。同時に司馬達が積年の本望を達する時期が來た。曾つては稚兒輪のしま女、一たび出家の身となりしより、持戒堅固に佛體に仕へて三寶を敬ひ、佛典にも通じて看經も怠らない、すでに十三歳の春三月、遙かに百濟に赴いて得度式を擧げ、歸來内外の崇拜を一身に聚めて、漢人夜菩の娘とよ、錦織壺の娘いしの二少女は善信の德を稱して弟子になつた。禪藏尼、惠善尼とはこの二人の事である。馬子に於ては此上なき掘り出し物、三人の尼君をば殆んど靈佛の來臨かと喜び勇んだ、大齋會を設け、塔を大野の丘に起すなど、一時に佛法は上流社會を風靡せんとする勢、されど悲しきことには、佛法の勢力は即ち馬子大臣の勢力である、相反せる物部黨の堪へ得べきことではない、忽ち兵を起して蘇我氏の寺に到り、塔を燒き、佛像を倒しまた三人の尼僧も横暴なる彼等の捕ふるところとなつた、あはれなるかな、幼き三尼が運命は風前の燈。多年私憤の的となつて、其衣は剝がれて赤裸々となり、其住居は奪はれて暗室に投ぜられ、食はすでに斷れて正に三日、迫害いよ〳〵加はつて三尼か信仰はます〳〵堅い、甘言苦語、術の施すべきなく、遂に暗室を引張り出して市上に撻ち、更に荒繩に括つて濱邊へと引出しては、打下す杖も折れよとばかり。全身時ならぬ花の紅！　慘忍ます〳〵加はつて三女が覺悟はいよ〳〵分明。傍觀者は手に汗して幼き三尼が決心に泣いた。

反對黨の軍吏も、かくて猶泰然自若、素志を變へぬ幼き尼僧等の信念に動かされて、翻然として反省するところあり、自ら髻を切つて悔悟を表し、厚く三尼を供養せしと云ふ、それが普く世に響き渡り、まだ妙齡にも達せぬ尼さんの名が一時に聞えて、相競ふて佛門に投ずるもの多く、當時の貴婦人、宮中の女官等は片つ端から弟子入すると云ふ活劇を演じた。

靡然として天下の佛敎を具體的に統一し、そが隆勢に趣くべき根底を築きしは實に

十五歳未滿の少女等が生死岸頭の往來にも、確固不拔の大信念によく素志を貫徹した賜物と云はねばならぬ、一は佛教史上の美名として永久に傳ふべく、一は日本婦人の龜鑑として崇むべきである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

因に記す、司馬達は鞍部の姓を賜ひ、一子多須奈は用明帝崩御の際出家す、有名なる鳥佛師は多須奈の子である。

禪機潑溂たる高岳親王

「上」

大和は何となく詩的趣味に充たされた國である。奈良の都の夕まぐれ、猿澤の池の畔に佇む者は、誰しも古代の幽寂を忍ばずには居られまい、其神錆びたる風致は潑溂と躍り上る緋鯉眞鯉の群にも認め得るてはないか。若しそれ一歩春日山の地を踏んだものは、集ひ來る女鹿男鹿のやさしき瞳にも遠く一千年の昔、歡樂の夢路を辿りし大宮人の面影が彷彿として居るのである。悠長なる奈良の都、人境倶に悠長なる都の水に育くまれたる大宮人の體度はいづれ劣らぬ華奢の優姿、絲竹管絃の調べにうき身を窶したものてあつた。かゝる時代、かゝる人々のその中より突如、規道を逸して千古の偉丈夫高岳親王は現はれた。

親王は一天萬乘の天皇の御子として、しかも皇太子の榮位を占め給ひし尊き御身、生れながらにして、羅綾錦繡の褥に包まれ七寶莊嚴の殿堂に成長せし事は云ふ迄もない。然るを一朝の發心、法の爲とは云へ不惜身命の意氣は、燃ゆるが如き求道の至誠と相俟つて、單身蘆葦にも等しき一帆の小舟に大海を橫切り、遠く支那を指して瀨戸内海を乘出した。大象は元來兎徑に遊ばず、日本六十餘州は親王の如き大偉材を容るるべくあまりに狹かつたのであらう。

かくて親王は決死の覺悟を以て支那に向はれたが、天何ぞかゝる偉丈夫に災すべき

航路無事、支那に着いた後の活動は當時の日本人として實に痛快を極めた。支那は全世の唐の時代、親王在ること二十年、四百餘州錫を飛ばして、あらゆる方面に活動を試みた。これより親王は更に勇進、陸路千里、印度に佛陀の靈蹟を探らんとの大志を發願されたのであつた。乞ふ聞け、親王の渡唐は正に六十歳の春であつて、印度の內地に踏み入らんとせしは八十の高齢に達してからである。時は千年以前の往昔。實に當時の日本人としては一大奇蹟と謂はねばならぬ。否、早老早熟、大根大氣の慨に乏しく、一時に熱中して耐久の操守を缺く日本人中、果して今後も親王の如き偉丈夫が出現するであらうか。

余等はかゝる異型異色の大人物を見出せしと同時に修養史上の珍として其間に何物かを學ぶところがなくてはならぬ。結果の如何に關せず、親王の意氣は柔弱處女の如き當代の青年には、實に頂門の一針である。親王の目的果して遂せられたるか恁うか乞ふ暫く本篇の完結を待て。

「中」

人皇五十代桓武帝は其武功、其品格共に英邁の君主たりしは明白なる事實である、乍併、聖武帝以後稱德光仁濫惠の後を承けて、朝廷の貧、國民の窮、已に業に著しかりし事と、帝の治世二十五年、多くは遠征、遊獵、遷宮、造營等の爲めに兵は鋒鏑に死して民は運輸に勞れて居る。されば天下の人心は靡然として無常を感じ、凄々たる讀經の聲と哀々たる誦念の響とは、我國の上下を通じて梵鐘の音と共に寂しき印象を與へて居た。其後を繼いだのは平城天皇である。天皇は桓武の子なりと雖も、四周の空氣既に斯の如き有樣に感化せられし爲めでもあらう、至つて雄圖壯心に乏しく、文藻風流に富みて、物に感じ易き憐愛の念深かりし君子であつた。

高岳親王は實に平城天皇第二の皇子として降誕遊ばされた方である。然るに止むなき事情のために、父帝は其同母弟神野親王を立てゝ皇太子とした、高岳親王一代の事歴を飾る雄烈と悲慘との幕は早くも開かれんとする、即ち父帝の在位は僅かに五年、

神野親王立つて位に即く、これ嵯峨天皇である、高岳親王はかくて嵯峨帝の皇太子となつた。

運命の神は大君の左右をも自在に操るの糸を握つて居る。平城帝の寵姫なる尙侍藥子が、この時に及んで平城を位に復せしめて己が威福を擅にすべく亂を起しゝに累を及ぼされて、其隱謀に與からずと雖も亦免るゝことは出來ぬ、不幸にも高岳親王は遂に位を廢せらるゝの餘儀なきに至つてより、逆境に在ると前後十三年。あはれ呱々の聲を擧げたる奈良の都の池水は永久に不變の色を漂へつゝあるにも不拘、親王が身の上はあまりに波瀾多き生涯に入つた。弘仁十三年、僅かに四品に叙せられたが、幼時の榮華を回想すべく、寧ろ苦しき叙勳ではあるまいか、人間の性情はかゝる時に發揮する、順逆の二境は決して人にあるものではない、大材親王の如き、かゝる場合却つて身を修養場裡に運び得たことを喜ばれたてあらう。默想、兀坐、練膽、入定、親王は奮然として髮を剃り落し、名を眞如と改めて一足飛びに靑道心の群に入つた。昨日迄の榮華は春窓一場の夢と流して今日は東寺の衆僧に伍し、墨染の麻の衣の裾をからげて或は水汲みに、或は掃除に、馴れぬ手業は如何に新發心の身を苦しめた事であらう。

霞靆く九重の宮居の空に未練は殘らざりしか。否一念鐵石よりも固き眞如の求道心はいかて浮雲にも等しき現世の榮華を戀ふべきものぞ。非凡の天資に兼ぬるに非常の刻苦を以てしたる眞如比丘は、三論を道詮に學び密敎を空海に受け、學德一世に高き大阿闍梨となり給ふた。所謂眞如法親王とは其異名てある、法の爲には何物をも犧牲にして敢て憚らざる大覺悟を持てる親王は、最早日本六十餘州には師とすべきものはない、勇猛の氣質は更に進んで、異域の境に法を求めんとの志已まず、終に貞觀四年入唐の企てをするに至つた。時に御年六十歲。

『下』

昔支那に於ける趙州禪師は八十歲にして行脚の途に上つたと云ふ例はあるが、六十

歲にして遠く異鄕の空に法を求むべく、片々たる小舟に棹されたる快漢は、恐らく親王以外日本にはあるまい。元より法のためには御身を損つるの覺悟を以て、瀨戶内より六連島を經て、海路恙なく、一帆の風に任せたるまゝ、十二日目唐の明州寧波に着いた。當時に於ける海外に赴くことの容易ならざる事は、今日世界各國を歡巡するよりも一層の至難であつた。而も我國の内情は皇族の孱弱短命、浮華風流の中より挺んて、獨り六十を過ぎたる高齢の御身を提げつゝ再び還らざるの入唐は實に海國男子の一大痛快事とせねばならぬ。親王は唐に在ること二十年、八十歲を過るに至る迄、一日も席暖かなる暇もなく、四方に錫を飛ばして大陸の山河を踏破し、巨刹を敲き名僧を訪ひ、あらゆる難行苦行を積みて、問法求道に汲々として寸陰だも空しく費やせし如きことはなかつた。

親王の行履は更に釋尊の流れを汲みし高僧の行持に一步たりとも相讓らざるの有樣である。而も親王はかゝる艱苦を嘗めつゝ、寸毫屈せるところなく、雄心更に雄に、堅志愈々堅を加へ、之に鞭ち之を驅りて、征路萬里、單身陸路を天竺へと、佛陀の靈跡を探らんと企てた。是れ實に我が陽成天皇の元慶五年であつて、平城天皇より、已に六代を經過して居るの時てある。古今獨步の高岳親王！我國上下三千歲、而も親王の如き勇猛豪邁の偉人は一人だもない。思へ！一千有餘年前の往昔である。而も人生の本務を盡し了れる八十の老僧が、磁石一個を便りとして、天竺の内地に踏み入つたことの如何にも壯快極まる話ではないか、予は往年故ありて、日本に於ける佛蹟參拜者の誰彼なるやを調査して、漸く約廿名を得たが、而も明治維新前は親王唯御一人のみ、其苦辛の程も略想像し得るところてある。長眉雪よりも白く、兩眼は電の如く、皮肉共に枯れたる古羅漢の如き老僧が、孤影瓢然と、一笠一錫、幾日人煙を絕せる所を過ぎ、幾里人跡を沒したる所を渡つたことてあらう。辛酸具さに嘗め、飢渴交々至り、幾度か死地に陷り、否寧ろ死地の中のみを、經過して、瘦身愈々癯せ、白眉益々素く、恰も枯木に靈の入りし如き風釆を以て、進み進みて老撾國に入つた。只見る流

沙河の流水洋々たるところ、一個の大怪物あり路に横はつて居る、親王の至るを見るや直ちに身を起し牙を鳴らして近いて來た。是なん丈に餘る餓虎であつた、親王の御身をば好箇の餌食とばかり、今や飛付かん有樣。

あゝ八十餘年苦心奮闘の生涯を經て今日に至り、遙々天竺に佛蹟を巡拜せんとして餓虎の襲ふところとなる、奇しき運命に相遇したものではないか、親王手にせる錫杖を投じて微笑して曰く「憾むらくは、我老いて肉乏しく、以て汝が饑を充たすに足らざらんことを」と、即ち飜然と身を虎口に投じた。千古の偉人高岳眞如法親王は、東洋各國を舞臺として、あらゆる雄烈と悲慘とのドラマを演じ了り最後の幕を閉ぢた。

女禪客慧春

一

東海道足柄山の一角、白雲深くこめ大樹欝密蒼穹を衝く處、其間に莊廣なる堂宇は散在して居る、是れぞ大雄山最乘寺である、開山は了庵慧明禪師と云ひ、慧春は實に此の禪師の妹である。

慧春は相州糟谷の生れ、姿色いと艶かにして萬人に勝れ、資性亦慧敏にしてよろづ風流の道にもたけ居たりとか、年頃にもなりたれば嫁にと望む人、他に世話せんと勸むる人あれども今暫し待たれよとて耳にも入れぬ、入れぬも道理、慧春の心には確く確く決する處があつたのである、慧春は幼にして父母に分かれ力と頼む一人の兄は浮世を捨てし雲水の身、西に東にさすらひて只管法を求むる外に餘念はない今は逢うて語る事さへもまゝならぬ。

小雨そぼふる秋の世の事であつた、秋は只さへ寂しき者を、若き女の只一人、孤燈の下に座して亡き親のこと。わが行末、こし方を思ひめぐらしてはそゞろに涙を催さざるを得ぬ、身にしみじみと浮世のつらさを感じたのは此時である、女なれども我兄の如く此濁れる浮世を捨てゝ佛門に入らばやと決心の臍を固めたのも此時である。

決心はしたもの丶何れの師に就いて得度すべき、あれやこれやと躊躇の中に早や三十の春を迎へた今はいつまでもかくて居るべきにあらずと思ふたのか、一夜忽然として慧春の影は糟谷の里に消えた。

二

翌日、朝早く足柄山の雪を踏んで大雄山の玄關に姿色端嚴なる一人の女が現はれて了庵禪師に、面會を求めた、之ぞ云はずも知れた慧春である、直に方丈に案內される、兄妹久しぶりの面會。

女は涙もろきものである。

「何用ありて此山に來たれる、若き女子の長居は雲水共の修行の妨げ、要を辨じて疾く去られよ」と、禪師の言語は嚴である、慧春は靜かに年來の望みを語り、其望みを契へて佛門に入れ給へと願うた。

「出家は大丈夫の成すべき事である、殊に禪門の修行は意志柔き兒女輩の中々企て及ぶ處でない、古來より女人にして釋門に入つたものも少くはない、されど反つてそれがため佛法を汚せし例も少くない、殊に其方は人よりも容貌すぐれて美しい、尙ほ更ら道の妨げとなる、早くかゝろ念は打ちすてゝ山を下り他に嫁づかれよ」と、禪師の言語は親切である。

慧春は之をきゝ終りて熟々心に思ふには女なりとも專心に修行せばなどて男子に劣るべき、兄上が妾の出家をゆるさぬは一は妾の顏の美しきと一は妾を他の女の如く意志の弱き者と思ひ給ふてならむ。いざ妾が鐵石より堅き決心の程を見せんと、慧春は默然として禪師の前を退いた。

暫くして又師の前へと現はれ、禪師に向ひて「此顏ならばよろしきや」と上げたる慧春の顏は如何にせしか花の如かりしその顏には頰と云はず額と云はず縱橫に鐵火箸の跡がある、庫下の火鉢にて鐵火箸を燒きて面上に烙印したのである、禪師も之を見て已むなくみどりの髮を切つて山に止まることを許した。

往昔支那に於て二祖慧可は達磨の法を聞かんと嵩山に上り雪中に膝を沒して立つこと一夜、尚ほ許されざるを以て臂を斷つて其かたき決心の程を示したとあるが慧春は確かに慧可にも劣らぬ堅き心の女である。出家以後の慧春の修行の勇猛精進なること、實に驚くべき程であつた、了菴門下幾百人の男子も之には及ぶものがなかつた、禪師一日大衆に向つて「僧、巴陵に問ふ、祖意敎意是れ同か、是れ別か、陵曰く鳥寒うして樹に上り、鴨寒うして水に下る、と請ふ一轉語を下せ」と、時に慧春直に衆中より出て來りて「賢臣二君に事へず、貞女兩夫に見えず」と答ふ。禪師此の語をきゝ印可證明を與へられたと云ふ。

慧春は已に大事を了畢したのである、此れより後は機用無礙、縱横自在にして其鋒に當る者がなかつた。

三

其頃鎌倉の圓覺寺は中々に禪風が盛んで四方より集る雲納常に四五百人を下らず、只管參禪辨道に怠りなく、關本の最乘寺と兩々相對して下らざる程であつた、或る時最乘寺より此圓覺寺へ使を遣らねばならぬ用事が出來た、此は一山を代表しての使である、實に單身敵の陣中に乘り入る軍使の如き役目である、用事のみてはない、必ず宗旨の上の問答がある。幾百の雲衲を片ぱしより一人にて切つてのける確信がなくては行けぬ、了菴禪師は大衆を一堂に集めて誰れか此任に當るものなきかと評論をなされたが、我れ其任に當らんとして出る者がない、皆な左右を顧みて默然として居る、折りしも「我れ其使を仕らん」と現はれ出でたるは、誰れあらう、慧春である、日頃の手なみ知つては居れど了菴門下數百の男子ありながら此大役を柔弱なる一比丘尼に委ぬるは一同の面目にもかゝはることゝ思ふ者もあつたが、禪師は「其方ならば氣使ひなし」と直に慧春其使者の大役を命ぜられた。

最乘寺より使者來れりとの報は瑞鹿山の寮から寮へと傳へられる、多くの衲僧はい

そぎ山門前に整列し禮を厚うして迎ふ、一同は如何なる怪偉の僧や來れると見れば纖弱なる一人の比丘尼であるから皆な心よからず思ふた、了菴門下の慧春尼と云へば中中あなどり難しと聞き及べと高が女である、何程の事あるべき、よし赤耻かゝしてくれんと。一人の雲水突如として慧春の前に現はれ、一問一答二人の間に大活劇が演ぜられたが元より慧春の敵ではない、慧春は堂々として方丈に進み、愈々圓覺寺の和尚に相見も終つて座に就くや、和尚は侍者に御茶を進ぜよと命じた時に侍者は洗足盥へ少しばかりの御茶をさして恭しく慧春の前に持つて來てお茶を召しあがれと云ふ、慧春は受取るや直に和尚の前へ持ち行き、「此れはこれ堂頭和尚平常受用底のもの請ふ喫せよ」と差した。さすがの和尚も此の活機には献ずることが出來ず召默して云はなかつたと云ふ。かくて慧春は圓覺寺幾百の雲衲が驚ける顏を後に見て最乘寺へ皈られた、此より、慧春の名は州の内外に響くに至つた。

四

暫し菴を山門に建てゝ往來の雲兄水弟を接得せられたが、晩年になつて、薪を最乘寺三門前の盤石の上に積み、其中に端坐し、火を四方より放ちて火焔裡に入定せられた炎々たる紅蓮の舌は上に濛々たる烟は横に靡く兄の了菴禪師、傍に來りて問ふ、「尼熱きか、尼熱きか」と、尼は烈焰中にありて動ずる色なく、聲高らかに、「冷熱は生道人の知る處にあらず」と恬然として火焔裏に化したと云ふ、實に勇ましくも健氣なる最後ではないか。

北條時宗と祖元禪師

『上』

我國は古來多くの英傑を以て充たされ居る中にも、先づ第一に指を屈するは北條時宗であらう。時宗の事歷に就ては、其功力の偉大なる今更言ふまでもない。

時は弘安四年閏七月一日、彼の博多に於て數十萬の元兵を敵手とし、國家は累卵の

危きにも似たる、古來未曾有の大事件に於て、斷々乎たる處置に出て、遂に彼れ數千百の艨艟を碎破し、敵の貔貅全部餘さず海底の藻屑になしたる大活動に至つては、實に幾千歳の大快事、青史を讀みて思はず、卓を打ち痛快を叫ぶ者のみである。乍併、吾人は今一歩を進めて當時に於ける彼れ元の勢力と我國の內情とに鑑みて時宗の責任に思ひ及ぼしたい考へてある。

抑も時の元王忽必烈とは何者てあらう遠くその祖を尋ぬると、彼の有名なる鐵木眞に初まつて居る。鐵木眞は蒙古より崛起せし古今の怪傑、忽ちにして天山を踰へ鐵門關を破り、西は歐洲の東南部を略し南は交趾緬甸を征し、東の方印度を掠め、北は露西亞、匈牙利を侵し、嚴然として自ら成吉思汗と稱するに至つたのてある、成吉思汗とは王中の王なる意、其大膽不敵なる擧動に到つては實に驚くの外はない、其血を傳へたる忽必烈、勇猛の氣質に於ては祖を凌ぎ、更に版圖を擴め、金、宋を滅して元と號するに於て益々暴威を逞うした。

夫れ元は、易に所謂「大哉乾元」の義に取ると云ふ。されば元と謂ひ、成吉思汗と謂ふ、其胸中たるや宇內を統一せずんば止まざるの槪あるは申すまでもなく、旣に四隣を威喝し了つて餘勢南洋諸島に迄及ぼして居ると云ふ有樣、忽必烈の眼中には唯眇々たる一島嶼の映ずる外、日本帝國の存在等は無論認めて居らぬ。眼ざわりなる小島奴を下すにも及ばぬと書を致し使節を派するに至つた次第である。

これも一朝一夕の事ではなく、寬仁三年より正安三年に到る凡そ三十餘年の人しき洞喝又懷柔、或時は對馬壹岐を侵して我鼎の輕重を試み、又或時は夜叉の鋒芒を露はしたる威嚇文を齎らし來つて處決を促す。されど一は文永五年二月より一は建治元年九月、更に弘安二年六月に到る前後數回、其使節を博多に斬首せし英斷を敢てせしは誰あらう?、三歳の童子も知る、時の執權北條時宗の勇膽に基く所以てある。

『中』

然らば北條時宗とは如何なる人てあるか、吾等は更に一歩を進めて其人格の全體を

知りたいのである。

即ち父は名にしおふ最明寺時頼、母は陸奥守北條重時の女、十一歳にして小笠懸けの弓術を能せし如き、十三にして従五位下左馬頭に任ぜられし如きは人の知るところ、同時に其膽力の雄烈なるを聯想せざるものはないのである。

乍併、「齡漸く長ずるに從ひ、心益々精、才愈々巧なるも、意氣柔弱恰も處女の如し」とは時宗の自著「途の草々」等に臆面なく暴露されてある事實ではないか、即ち彼はあまりに膽の狹少なるを憂へ、之れを除くために如何ばかりの苦心慘憺を費したるかは順次記述するところを以て明かにいたしたい考へである。單に史上に現れたる强毅不撓とか、剛斷果決とか云ふ評は相模太郎の半身だも撮影せざるの語、吾人をして言はしめば、時宗の弱點は膽の小なるにあるので、同時に彼の全面目を發揮したる外冠の處理鹽梅は柔弱處女の如き彼が不動の修養に努力せし結果に外ならぬと信ずるのである。

北條時代に於ける外寇の患たるや、時宗に初まつたのでない事は前に述べた、されば父時賴の如き西蜀の僧蘭溪を請して鎌倉に建長寺を創立し、内實は幕下を離し、次いで宋より兀菴を入朝せしめて、心要を錬るの外帷幄に參與せしめ、以て外情を探りつゝあつたのである。夫が時宗の時代に到つて外事いよ〳〵繁くなり、顧みて自己の柔弱を知ると共に、偉材を名僧に求めて師事せんとの志止み難く、當時入宋の僧詮藏主英典主に托して迎へられたるは祖元和尙、即ち佛光禪師と云ふ方であつた。

この祖元和尙こそは實に時宗の後半身となつたのである。然らば時宗を知らんと欲する人は是非共祖元和尙を知らねばならぬ。

和尙在宋の當時、宋は元のために既に亡び、其住地たる溫州能仁寺も元兵のために侵された。而して其首領たるものが祖元和尙を捉へ、白刃を揮ひて其首に擬したのである、されど和尙は毫も動着せず、神色自若として偈を唱へられた、即ち曰く

乾坤無地卓孤笻　且喜人空法亦空

珍重大元三尺劍　電光影裏斬春風

と云ふのである。祖元和尚は大悟徹底の人、生死の關門は既に潛りぬけて居る。元兵が三尺の劍の如き尋常茶飯に逢ふたる心地、この心地がやがて時宗の元寇に於ける體度と現れたものである。されば元の首領も和尚の豪膽に恐れ、前非を悔ひて逃げ去つたとの事であるが、和尚は爾來亡國の民となつて處々を流轉して居る矢先、時宗の請に逢ふて我國に參つた。

「下」

時宗は幼時より自己の怯弱なるを知つて居た、其修養には尋常一樣ではならぬ事も考へて居た、依つて蘭溪、兀庵に師事し、更に詮、英の二和尚に弟子の禮を取つたが、何となく物足らぬ感がするので憂慮の矢先、祖元和尚の來朝はいかばかりの喜びを與へたであらう。今「問答錄」に記されたる一二を擧げやうならば

時宗「人生の憂苦怯弱を以て最となす、如何にして脫すべき」

祖元「脫すること甚だ易し、正に怯弱の來處を閉づべし」

時宗「怯弱何處より來る」

祖元「時宗より來る、試みに明日より時宗を棄し來れ」

其鉗鎚の嚴なること鐵鞭を加へらるゝよりも苦しかつたであらう。更に和尚は時宗のために五ヶ條の要訣を示された。

（一）外界の庶事務に心意を奪はるゝ事勿れ

（二）外界の庶事物に貪着すること勿れ

（三）念を止めんとする勿れ、念を止めずある勿れ、只一念不生をつとめよ

（四）心量を擴大にすべし

（五）勇勢を保持すべし

かくして時宗は、理を見るの明、事を斷ずるの力を養ひ得て豪膽なる偉人傑物となつたのである。

時しも弘安四年春正月、時宗一日和尚に面謁の折、和尚筆を取つて

「莫煩惱」

と、書かれた。時宗其意を知らず、故如何と尋ねた、和尚は「春夏の間、博多の邊に事あらん時に臨んで煩惱する事莫れ」と、唯這の三字で時宗は偏に身心の脱落を覺え、疑懼の關門を超越して、善謀善斷、怱必烈が幾十萬の貔貅にも動せず、よく我が金甌無缺の國家を守護し得た所以である。

生死岸頭の美花

上、板挿みの殉死

（一）

義に結ぶ主從は三世の縁、愛に繋る夫婦の情は二世と麗はしくも、骨肉を分けた親子兄妹の間には得て忌はしき事の起り勝ち、ましてや慾のためには闇を常なる人ごゝろ、淺ましきかな、茲に天晴當代の美花一輪、吹く夕嵐に潔く犧牲となつたる好箇の美談が遠く二千年の昔にあつた。人皇十一代崇神帝崩じ、垂仁天皇の二年三月、選ばれて皇后となつたのは、當時權勢ある彥坐王の女で狹穗姬と申された。歷代后皇中でも美容と德操とて有名な方である。然るに野蠻時代の悲しさには、狹穗姬の兄沙本古毘と云ふは元是、不逞の徒、隴を得て蜀を望むは夫れ人情の常、百に至れば千をと願ひ、千に至れば又萬をも諸願休むときなければ、心隨つて安からず、義理は誠に邪魔くさし、當つて碎けろの暴威は身を助け、將に機を見て帝位を奪はうと計つた、ある日、素知らぬ顏に皇后をば呼び寄せて云はるゝには。

「凡そ世に棄て難きものは何んてあらう、骨肉を分けし親子兄妹の情、夫婦の愛、今汝出てゝ皇后となる、而も帝と吾れと何れが重き？」

兄が意外の問に驚いたが、后はもとこれ姿形のうるはしきのみならで、心さまのやさしき情の深き、深窓の春にこもりても香爐峰の雪に簾をまくの才女ではない、されば

其の意のあるところも計りかねた、靜かに答へらく「妾、今幸に寵を今上に享けては居りますれど、萬一不幸にして、宮を逐はるゝやうな時でもあれば、寄るは親なき後の兄上樣、どうして輕重のへだてがありませう」我意を得たりと云ひ顏に兄はうなづいた。「左樣さ人間の美容は日々に衰へる、女は美容が生命である、其生命を失へば寵愛の生命も同時に消えて、尤も悲慘な運命の窮路に立たねばならぬ、皇后も今にして考へねば追ひ付くことでない！」「さればサ汝の愛する兄と共に天下に臨むべき機會をつくるは皇后の力、謹んでこの匕首をお預け申す……」、皇后の驚愕はどんなであつたらう、切に之を苦諫するも聽かれず、殆んど爲すところを知らぬと云ふ有樣、あはれ命ずる人は兄にして、敵とすべきは現在の夫帝王なり、命に服さば大逆人、服せず退いて密に帝に之を告げんか、正に己の手を下さずして兄を殺すと一般、孝貞の渦中に投入せられたる皇后の心緒は實に察するに餘りある。

（二）

晝はともかく四隣寂寥の夜の天地、孤燈かげ暗き一室の壁にうつれる我がかげを友として、唯一人悄然と更けゆく鐘を數へたらんには、越し方、ゆく末の思ひに逼られて涙は襟に止度なくふりかゝるのだ、ましてや、兄が無法の督促は屢々で其度毎に皇后は悲嘆の涙にくれて、丈なす黑髮のおのづからなる綠したゝらんばかりなるが肩にかゝりて、こぼるゝ幾筋の雪はづかしき頰にかゝれる、觀音樣の面かげに似てそれよりも、淋しく、それよりは美しく、小机に臂を持たして、深く思ひ入りたる眼は半ばねぶれる如く、折々にさゞ波うつ柳眉の如何なる愁ひやふくんで居るのであらう。黃金を鑠かす夏、萩の葉に風そよぐ秋、五年の星霜は夢の間に過ぎた。

ある時の事、天皇は程離れし高宮に行幸の御伴、宴撤せられて、天皇は皇后の膝枕で安らかに一眠、……女菩薩……內心の夜叉……晏然と無邪の境に遊ぶわか膝の人を眺めてはフト兄の逆心を追懷した。

花を見る時、月を眺むる時、風を待つ時、雲をのぞむ時、掉さす小舟の波のうちに

も嵐にむせぶ山のかげにも、日かげに疎き谷の底にも、わが身は常に君が身に添ひて、水無月の日影つん裂くる時は清水ともなりて渇きも癒さん、師走の空の雪みれば寒き夕の皮衣ともなりて、君とは離るべき中ではない。さなり、醜美、善惡、直曲、邪正、あれもなし、これもなし、我れに隱すこともなく包むこともないと御信じ遊されぱこそ、心安く長閑におちつきて、かくも我腕により、此膝の上に睡つてお居で成さる、さるを妾の懷中には……と無意識に、兄より渡された懷劍を探つた、三寸の胸底は怒濤狂瀾の捲くが如く、すでに死を覺悟した后は思はず數行の涙にくれた。流るゝ涙はハラ〳〵と帝の頰にふりかゝる。

（三）

苦熱の涙は火よりも熱かつたであらう！

帝忽ち覺めて皇后に言はるゝやう「朕今夢に大雨さほより來り、小蛇朕が首を繞ると夢む、是れ何の兆ぞ！」このお言葉は實に皇后の肺腑を貫いた。今は猶豫すべき時ではないと、例の氣高いやさしい皇后の心は、脆い涙の糸すぢと化して、泣き倒れ、泣き崩れ、さてはしか〳〵と事實を明白に述べて、潔く服罪を請うた。天皇の御憤りは一通ならず、「大逆宥し離し」と大將軍八綱田をして直ちに金鼓を打ち、佐本毘古征討の旗を飜さしめた皇后は玆に到れば情として兄の危急を救はねばならぬ。王子を抱いたまゝ、兄の立籠つた稻城の中へ驅け込んだのである。

天皇は「汝皇后の罪ならず」と云はれたが最うこうなつては兄への義理、皇后は皇子のみを出し奉つて、自らは稻城を包む猛火の中に敢なき御最後を遂げて了つた。あゝ板挿みの殉死、死に處するうるはしき覺悟の程こそゆかしい話ではあるまいか。あはれ緣を賴にして在らぬ悲劇の一幕を演じたる、世にも情の板挾み、此の柵に囚はれて、無慘に散りぬる跡を思へば、浮世の幸福も亦なにかあるらん。あはれ、生死岸頭の美花。

下、媛が健氣なる最後

（一）

薄雲の炊烟縷々として空にたなびくところたゞ聞く松風の音は、琴の調べかと怪まるゝばかり、清高なる大天地に柔草の褥、大扶坐に大盃を傾けては無遠慮なる怪氣焰、濁酒の醉顏燃ゆるが如き一座の面々は誰あらう。

今を去る二千年の昔、時の朝廷と覇權を爭ひたる剛の者、筑紫の熊襲、川上梟師が兄弟である、一族、親類諸共に、今日は極月の中旬とて寒さ淩ぎの山家の樂しみ、飲めよ、唄へよ、舞へよ、騷げよの眞只中。ふと見る萬綠叢中の紅一點！端嚴美貌の少女が、可愛や酒間の斡旋に勞を取つて居る。梟師兄弟は醉顏斜めに恍惚として件の美人を側へと呼んだ。呼ばれた美人は破顏一笑、大の男を雙の膝へと丸め込んで、枕にかした膝頭夢路は、淡く通ふを見濟し、さて徐ろに懷中を探つた。採り出せしは短劍の九寸五分、キラリ閃めくと見る間遲し、兄なる梟師の息の根は止つて居る。この物音に弟梟師、逃げんとするを待つたと呼びとめ、組みつ組まれつ、轉びつ顚けつ、紅顏花の如き少女は又も當代無二の剛健家に一刀を刺した。彼が斷末魔の問答により、初めて知る窈窕たる花の少女は、人皇十二代景行天皇の嫡子、名は小碓尊、勅命によつて熊襲征討に參つたる十六歲の男子たることゝ――。人も知る、日本武尊の稱は彼が唇邊の微笑と共に永へに消へぬ當日の記念である。

（二）

花恥かしき美丈夫の、山海隔つる貳百餘里激浪險山の都の彼方には、あはれ幾千の少女は尊の遠征を恙なかれと祈つて居るのだ。さても中原の鹿、果して誰が手に入りしぞ、茲に都大路の風塵を拂ひし白芙蓉、そが端麗なる容貌と、高雅なる風神とを一身に集めし。弟橘媛こそは、この空前絕後、武將のモデルを我ものにした。

頃は景行天皇即位四十年、東蝦夷の蠻族又も背いて、邊境ために擾動の絕間がない時や來れり、尊の骨は鳴り肉は躍る。「臣必ず其亂を平げん！」と父君への奏上「朕察するに汝の人となりや身體長大、容姿端正、猛きこと雷電の如く向ふ所前なし、即ち

知んぬ形は我子にして實は神人世の至武を振て姦鬼を攘へよ」信頼斯くの如き詔勅を忝うし、凛々しくも裝ひたりな威風堂々、六師を統御する天晴の武者振り、されど尊は、半面戰の子にして半面情の人たる、愛妃弟橘媛を從へられた。かくて駿河の夷賊を平げて一行は更に進んで上總の敵に向はんとす。軍船正に相摸海上にかゝらんとするの時こはそも如何に、暗雲天に漲つて見る見る暴風怒濤!!!

今や黑幕は切り落されて只これ一場の悲劇。

（三）

風は次第に吹き募つて、浪は一しほ荒く、一しほ猛く、さながら魔神の群が必死の勢もて押しよせ來らんやう、軍船木の葉の如く當に覆沒の悲運を宣告されんとする有樣！　又しても一陣の怒風、忽ち小丘よりも高き濤は雪山を築き、忽ち千丈の白布を散らすらんやうに碎けて落る。とよ〳〵狂ふ浪又浪は百萬の惡鬼の叫びに似て、渚に見えし一千の巖はたゞ一呑にせられて了ふぞ。六軍の士ために色を失ひ、尊は當惑の眉を顰めるばかり、曾つては雷電の猛きに似て向ふ所敵なしと稱へられし當代の武將も空しく手を拱いて、來るべき運命を待つより外に術がない。時こそよけれ。

皇妃弟橘媛は身を以て六軍の安全を祈るべく、尊の前に跪きて「君、今や大詔を奉じて遠く征途に就き、不幸玆に船を杭まる、思ふにこれ海神が尊の功を妬んで猥りに君を仇せんとする者、妾君に代りて之れに當り、以て六軍を安からしめん歟」と、尊の許諾を得、起つて舳頭に躍り上つたる一朶の美花！　聞け！　海國の女神が美しき唇を漏れ出るこの言の葉を「咄!!!何物の魔神が敢て王師に抗する、妾今自ら進んでこの毒龍と戰はん――」滿腔悲憤の絕唱。細腰柔婉なる皇妃が胸中は熱血に充たされて居る。かくて叫喚地獄の眞只中、潔く背の君の犧牲、否祖國のために我が身を葬つて了たのだ。

（四）

生れて活達、夙に尊を扶けて遠く征途に就くも妃は元是れ愛情濃艶なる女である、

鴛鴦の契りは永きが上にも永かれと思ふ命を、海濤一場の活劇に身を提したる健氣の意氣よ……何等の悲慘事ぞ……あはれ水沫の姿は水晶珠となりて四散八飛す。さればにや、耳を聾せし鼕々の音も次第に薄らぎ、白龍を御せる無形の惡魔も、自ら姿を潛め軍船は初めて悠々と進航することを得るに到つた。さはれ多感多情の尊の心中果して如何、常に媛の死を追懷し、轉た悼慕の念去り難く、鬢髮ために幾層の秋霜を加へた。卽ち歌ふて曰く、

さねさし相武の小野に燃ゆる火の
火中に立ちて問ひし君はも

と、斯て尊は陸奥を征し、歸りて甲斐に入り更に上野の碓氷峠に立ち、顧みて茫渺たる海洋を望み、そゞろ當時を懷うては勇壯婉淑なる媛の上を忍び、感慨やる方なく。「吾妻者耶！」と、暗淚泫然、鎧の袖を霑ほされし。かくて餘香は幾千歳、傳へられてはいよ〳〵かんばしく、散りて榮ある生死岸頭の美花！　さるにても媛はげに一代の女名利と謂ふべき哉。

禪學文庫

第一篇	鈴木大拙先生著	禪の第一義	定價一圓 郵稅八錢
第二篇	大内青巒先生著	青巒禪話	定價一圓廿錢 郵稅八錢
第三篇	忽滑谷快天先生著	達磨と陽明	定價一圓十錢 郵稅八錢
第四篇	新井石禪老師著	修道禪話	定價一圓 郵稅八錢
第五篇	竹田默雷老師著	禪の面目	定價一圓 郵稅八錢
第六篇	菅原洞禪先生編	禪林奇行	定價一圓 郵稅八錢
第七篇	釋宗演老師著	拈華微笑	定價一圓 郵稅八錢
第八篇	加藤咄堂先生著	劍客禪話	（近刊）
第九篇	中原南天棒老師著	南天棒禪話	（近刊）

大正四年一月六日印刷
大正四年一月十二日發行
大正四年一月廿五日再版
大正四年二月十日三版
大正四年三月五日四版

不許複製

禪學文庫第六編
定價金壹圓

著作者　菅原洞禪

發行者　高島大圓
東京市小石川區原町六番地

印刷者　佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿七番地

發行所　丙午出版社
東京市小石川區原町六番地
振替東京一五六八六
電話番町二六〇八

大正文庫

明治昭代の榮光を記念し大正聖世の文敎に貢獻せむがために現代第一流の宗敎家學者文藝家を煩はして『大正文庫』を發行し今や全部十二册こゝに完成す外形は電車汽車中の繙讀に便に内容は處世修養の伴侶に好し――（全部完成）

- 第一編 明治思想小史 文學博士三宅雪嶺先生著（定價卆錢郵稅六錢）
- 第二編 此一筋 文學士沼波瓊音先生著（定價七十錢郵稅八錢）
- 第三編 來世の有無 新佛敎徒同志會編（定價七十錢郵稅八錢）
- 第四編 禪の極致 大内靑巒先生著（定價六十錢郵稅八錢）
- 第五編 予が婦人觀 黑岩周六先生著（定價六十錢郵稅八錢）
- 第六編 狐禪狸詩 釋淸潭先生著（定價六十錢郵稅八錢）
- 第七編 噴火口 高島米峰先生著（定價八十錢郵稅八錢）
- 第八編 ひとみの旅 杉村楚人冠先生著（定價六十錢郵稅八錢）
- 第九編 書窓車窓 加藤咄堂先生著（定價六十錢郵稅八錢）
- 第十編 人と超人 レヨウ原著堺利彥先生譯（定價九十錢郵稅八錢）
- 第十一編 六十一年 文學博士村上專精先生著（定價卆錢郵稅八錢）
- 第十二編 沈默の饒舌 内田魯庵先生著（定價八十錢郵稅八錢）

佛敎講義錄

僅に一ヶ年て佛敎の大系が學び得られる 學界空前の佛敎講義錄出づ

佛敎がわからなくては日本の歷史の解釋が出來ない日本の文學も味ふことが出來ない日本文明の由來するところも知ることが出來ない從つて佛敎を知りたいといふ人は多いが唯識三年俱舍八年ては手もつけられない そこで誰にでも手つ取り易く佛敎の大系が飲み込めるやうにといふので現代有數の學者に請ふてその專門とするところの學科の講義をして貰ふことにしたのである世の徒に大家の名を列して杜撰な代作講義を掲載するが如きものと同一視するとなかれ

- 佛敎研究法 東洋大學敎授 曹洞大學敎授 島地大等
- 佛敎概論 加藤咄堂
- 印度の佛敎 帝國大學講師 ドクトル 荻原雲來
- 支那の佛敎 東洋大學敎授 境野黃洋
- 日本の佛敎 叡山大學敎授 境野黃洋
- 佛典の解說 帝國大學講師 文學士 常盤大定
- 法華經義釋 天台大學敎授 日蓮大學敎授 島地大等
- 禪學要義 加藤咄堂
- 歐米の佛敎 宗敎大學敎授 ドクトル 渡邊海旭
- 佛敎美術 帝國大學講師 文學士 中川忠順
- 宗敎學要義 眞言大學敎授 文學士 融道玄
- 基督敎綱要 慶應大學敎授 東洋大學敎授 廣井辰太郎
- 神道綱要 足立栗園
- 其他臨時講義を增加すべし

毎月一回十五日發行 一册菊判二百頁、滿一ヶ年（十二册）完結

	一ヶ月分	三ヶ月分	半年分	一年分
購讀料	六十錢	一圓五十錢	三圓	五圓五十錢
東修	五十錢	五十錢	五十錢	五十錢
合計	一圓十錢	二圓	三圓五十錢	六圓

發行所 東京小石川區原町六 振替東京一五六八六 電話番町二六〇八 丙午出版社

『萬朝報』記者 大住嘯風先生著

現代思想講話

定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむにはまづ其の思想の由來せる傳統を究め進んでゼームス、オイケン、ベルグソン等の如き現代思想を代表する大思想家の說くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ深邃なるその根本思想を捉へ來りて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を養ひ人生の眞義を了得せしめんとす洵にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

羅村隱士 久津見蕨村先生著

現代八面鋒

定價金八拾錢
郵稅金八錢

物平を得ざれば則ち鳴る而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせず之を發して八面に當り餘し十方に喝破すその鋒先の向ふところ女優あり倫理あり藝者あり教育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗教あり眞にこれ多角多趣味の一大珍書

羅村隱士 久津見蕨村先生著

眞人僞人

定價金壹圓
郵稅金八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の厄命を蒙ること亦數次聊か癇癪を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揚げ僞人はこゝにその面皮を剝かるその論鋒その評深刻洵に筆端風を生じて文に響あるの慨あり

堺 利彥先生著

樂天囚人

定價金六拾錢
郵稅金六錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉妬、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらるゝ社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之を一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

賣文社長 堺 利彥先生著

賣文集

定價金壹圓
郵稅金八錢

發端之辭 著者の友人先輩六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短錯落奇拔痛快の評語 序 賣文社の記、著者自ら其の事業を語る 第一編 一、唯物的歷史觀 二、予に對する態度 三、宗教とは何ぞや 四、木下尙江君を評す 第二編 一、暮春の古墨 二、予の夢 三、墓地見物 四、寸馬豆人 五、逆徒の死生觀 六、死の趣味 第三編 喜劇「谷川の水」(バーナード、ショウ原作) 第四編 一、告白、蕨村 二、クレンタビユ、大杉榮 三、獨眼人耶蘇、高島米峯

堺 利彥先生著

ルソー自傳 赤裸の人

定價金九拾錢
郵稅金八錢

佛國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソーの「エミール」によりて啓發せらる波瀾重疊神出鬼沒の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは透識能文の堺利彥先生なり一讀してルソー前に立てるの感を起さしむ

カウツキー先生原著
堺 利彥先生譯

社會主義倫理學

定價金壹圓
郵稅金八錢

哲學界には迷妄にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本能主義が流行し宗教界及び教育界には淺薄にして僞善なる因習道德が唱導せらるゝ今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の蒙を啓き此の昧を照すは譯者が深く痛快とする所なり著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるゝの人日本の學界と文壇とは遂に此書を無視すること能はざるべし(譯者)

幸德秋水が最後の文章

基督抹殺論

定價金七十錢
郵稅金八錢

一代の論客として知られたる幸德秋水も誤つて天地の容れざる大逆無道を企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に吟呻せるの間特に此一卷を著す所謂痛絕快絕行文悲絕愴絕嗚呼幸德秋水死に臨みて基督を抹殺し了せむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の賞識を竢ふ

文學士 渡邊又次郎先生著

最新論理學

定價金一圓廿錢
郵税拾貳錢

本書は哲學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして內容の整頓せる簡潔なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要なる題目を掲げ卷末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

加藤咄堂先生著

筆と舌

定價金七十錢
郵税金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として演說と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實驗談は正に現代の靑年を奮起せしむるに足る大文字なり

村上博士序
藤井瑞枝女史著

亂れ雲

定價金八十錢
郵税金八錢

女史は跡見花蹊先生門下の才媛にして學界の先覺文學士藤井宣正氏の未亡人なり夙に文才と俠氣とを以て知らる「亂れ雲」一篇集むる處二十餘章四百五十餘頁諷刺敎訓皮肉或は鋭き觀察或は隱れたる溫情あらゆる方面を輕妙洒脫なる筆を以て大膽に且つ痛快に描寫し實に一部の現代世相史を成す

「無我愛」首唱者
伊藤證信先生著

新氣運

定價金八十錢
郵税金八錢

斷然傳習と敎權の束縛より脫却して世の罵詈嘲笑輕侮憎惡の中に立ち臆面なく忌憚なく無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの!

三宅雪嶺先生序
高島米峰先生著

廣長舌

定價金七十錢
郵税金八錢

加藤咄堂先生曰はく「米峰今胸中欝勃の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企ざて及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を通して當世人士の肺腑を刳る洵にこれ堂々警世の大文字」と

加藤弘之先生序
高島米峰先生著

惡戰

定價金八十錢
郵税金八錢

著者曰はく「これ僕が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく識なく殊に加ふるに資金なく後援なき裸一貫の靑年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代靑年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と

島田三郎先生序
高島米峰先生著

理想的商業

定價金二十五錢
郵税金六錢

賣ると買ふとは對等なりお客威張つて商人屁と埀れること甚だ道理なしそれ賣るに法あり買ふに道ありこの法を說きこの道を敎へ以てお客樣といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものにはうんと買へと勸め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは即ちこの書なり

前外務大臣 伯爵 林董閣下序
東北大學總長 澤柳政太郎先生序
櫻所 干河岸貫一先生著

修養史譚

定價金壹圓
郵税金八錢

林伯爵曰はく「此の書を繙くに古今東西の史乘より異世同轍の事實二百對を擧げたる者にして敎師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらむ」と

修養の模範

前外務大臣 伯爵 林董閣下纂譯

定價金七拾錢 郵稅金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では教師が生徒にする話材の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する美譚の乏しいのに弱り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを歎いて居る譯者これを憂へ書を讀む每に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を鈔譯摘錄して遂にこの書を成すに至つたのである弊社今こゝに世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である

通俗 修養論

文學博士 村上專精先生著

定價金壹圓 郵稅金八錢

古聖實踐の芳躅を辿り前賢研究の結果を收め苟も規箴とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依て以て極めて平易に修養の理論を說明し苟も模範とするに足るべき善行美譚は悉くこれを蒐錄して依つて以て極めて明快に修養の方法を敍述す恐らくはこれ斯界未だあらざる精到完備の修養書たらむなり

改訂增補 自信錄

文學博士 村上專精先生著

定價金六拾錢 郵稅金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり當々已の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節說いて至らざるなく遂べて盡さゞるなし造歩せる佛教學者の見解は此書によつて窺ふべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし

誠のしるべ

文學博士 村上專精先生著

定價金四拾錢 郵稅金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道德も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

女性訓

文學博士 村上專精先生著

定價金四十錢 郵稅金六錢

本書の內容は天職中庸貞淑謙讓節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女子の缺點を攫み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡て世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

人物の修養

スタンフオルド大學總長 ジョルダン博士原著

マスター、オブ、アーツ 中村平先生譯

定價金五十錢 郵稅金八錢

澤柳前文部次官特に長文の序を草す其の一節に曰く、「ジョルダン博士は當今世界有数の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり我國人がその所說その意見を知らむと欲するの情並に之を知ることに依て利することと尠からざるは言を待たず……我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

修養處世 自己測量

ウヰリヤム、ハイド氏原著

鈴木券太郎先生譯補

定價金五十錢 郵稅金八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我邦現代の社會に聽めむとするもの他なし吾人が懸標邪辯の樸朴人格完成の砥礪立身處生の嚮導社會道德の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年卿等がこの生活難の世に處して新しき運命の局面を開くべき鍵はこゝにあり

人生問題

黑岩周六先生講演

定價金七拾錢 郵稅金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を說き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黑岩先生自ら人生問題に遂着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て玆に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と滿足と活力とを得て溫く且つ光ある人生に觸着することを得ん

東北大學總長 澤柳政太郎先生著

退耕錄

正價金壹圓
郵稅金八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも倘ほ腹ふくるゝ心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が資歷上百般の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなることを諷刺あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣焔あり理窟あり警說にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる考案あり言はんと欲する所は言ひ盡くして毫も時勢に阿らず誠に憂國慨世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

フエヒネル先生原著
文學士 平田元吉先生譯

死後の生活

定價金五拾錢
郵稅金八錢

本書は現世の事實を基とし最高の詩的想像を參へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱橫に敍述したる詩と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は親愛者を失ひし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を配ち又學者研究者に豐富なる暗示刺戟を與ふるや疑ふ可からず

杉村縱橫先生譯編

强肺術と肺病全快談

定價金九十錢
郵稅金八錢

本書前編は歐米に於ける最新の肺病根治法にして親しく譯者が實驗してその効果を收めたるもの後編は日本現代の名士が肺病全快の實驗談にしてこれによつて從來不治の病と定められたる肺病も必ず全快すべきものなることを立證せられたり世の醫師に弄ばれ賣藥に欺かれたる人々は本書を繙いて天來の福音に接せよ

文學博士 井上圓了先生著

南半球五萬哩

定價金九十錢
郵稅金八錢

南半球を一周し赤道を四過し濠洲南阿南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峽まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間の山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺憾なし插畫五十餘上更に花を添ふ

文學博士 井上圓了先生著

活佛教

定價金壹圓拾錢
郵稅金八錢

明治の宗教界思想界を震駭せしめたりし「佛教活論」は完成す僧侶の活躍寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛教をして活佛教たらしむるの福音

帝國大學教授
文學博士 高楠順次郎先生著

國民と宗教

定價金七十錢
郵稅金八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳說せられたる新著也苟も日本の國民たる者日本の宗教家たる者は一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる講話體なれば又以て演說講話の好模範たるべし◎附錄として研究上修養上極めて重要の論文數種を收む悉く學界の珍

文學博士 松本文三郎先生閱
文學士 羽溪了諦先生著

釋尊の研究

定價金壹圓
郵稅金八錢

本書筆を釋尊以前の婆羅門教の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に說き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脫の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の謬論を破る誠に教界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

京都帝國大學文科大學長
文學博士 松本文三郎先生著

彌勒淨土論

定價金壹圓
郵稅金八錢

宗教學上殊に佛教史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要なる地歩を占むるものは「淨土の思想」なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明によりて光輝を放てるも其他の半面は「彌勒淨土」の埋沒によりて全然暗黑に歸すこれ豈佛教史上の一大缺點にして又實に佛教界の一大恨事ならずや松本博士多年の蘊蓄を傾けその專攻する學科の立脚地より「彌勒淨土」の由來淵源を詳論し博士の舊著『極樂淨土論』と相待つて茲に佛教の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして恣に佛教の淨土思想を談ぜんとするものぞ

阿彌陀佛

ポール、ケーラス先生著
學習院教授鈴木大拙先生譯
定價金三十五錢
郵稅金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケーラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小說的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評嘖々たることや彝社叢に十年博士と居を同しうし最も博士と親善なる大拙先生を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

釋迦牟尼傳

東京帝國大學講師
文學士 常盤大定先生著
定價金七十錢
郵稅金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳說なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖是等の傳說が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳說の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り

孔子傳

文學博士 遠藤隆吉先生著
定價金壹圓四十錢
郵稅金十二錢

その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豐富にその觀察極めて銳利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未曾の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ

王陽明

高等師範學校講師
亘理章三郎先生著
定價金一圓五十錢
郵稅金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百般の問題を解決し盡くして遂に悟徹の妙境に入る豈偉ならすや本書はこの王陽明の人格を主題として其の實生活と學說とを併敍し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しかの勝程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

增補 聖德太子傳

東洋大學講師
境野黃洋先生著
定價金五十五錢
郵稅金八錢

佛教史家として夙に令名ある境野先生が其の精覈なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の敎主たる聖德太子の事蹟を敍述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所

一休和尚傳

大內青巒先生序
高島米峰先生著
定價金九十錢
郵稅金八錢

元日に髑髏を振廻はして人の度膽を拔き末期に糞を喰つて梵天に捧げた彼一休後小松帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうともせず一簑一笠ただ平民的教化のために一生を送つた彼一休痴か狂かはた一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

達磨と陽明

曹洞宗大學教授
忽滑谷快天先生著
定價金壹圓拾錢
郵稅金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を豁開して餘蘊なく造詣の工夫修養の方法爲學の用心精神鍊磨人格養成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道德の指導者たり

和譯維摩經評註

明楊起元評註
加藤咄堂先生和譯
定價金七十錢
郵稅金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明したるものを更に加藤咄堂先生が平明暢達の文を以て之を和譯し傍訓を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び禪を談せむと欲する者には勿論講習本として亦最も適當なり

加藤咄堂先生著

原人論講話

定價金六十錢
郵税金八錢

佛敎典籍多しと雖も之れを儒道二敎の敎義と比較して佛の嶄然一頭地を抜く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし著者今獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ篇頭には添ふるに古人の解説を以てしたれば佛敎の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

加藤咄堂先生著

通俗講話の理論及方法

定價金九十錢
郵税金八錢

通俗敎育の必要日に逼りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豐富なる經驗とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聽者を感動せしめ得べきかの理論と方法とを極めて親切に解説し多くの例話を擧げてその使用法を示されたるものなれば敎化の秘訣雄辯の奥義講話の資料收めて一卷の中に在り苟も講壇に立たむと欲する人一たび本書を繙かむか忽にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

東洋大學講師
釋清潭先生著

寒山詩新釋

定價金五十錢
郵税金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂漢か得て解すべからざるものは寒山士なり是れ韻語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

東洋大學講師
釋清潭先生著

和漢高僧名詩新釋

定價金五十錢
郵税金六錢

本書、漢は唐宋元明淸五朝の高僧に渉り和は虎關以後絶海義堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの淸秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩篇を釋義して此くの如きもの恐くは曠前なるべし

慶應義塾大學敎授
忽滑谷快天先生評釋

和漢名士參禪集

定價金五十錢
郵税金六錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時賴北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黄山谷蘇東坡白樂天張無盡裴休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話奇談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大德の鉗鎚に接するを得しむ

マクス、ミユラー博士原著
文學士 淸水友次郎先生譯

宗敎學綱要

定價金五十五錢
郵税金八錢

淸水學士佛敎大學に敎授として宗敎學を講ずるや近代稀有の宗敎學者マツクス、ミユラー博士の原著を講本とし隨つて譯し隨つて敎ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗敎學書としては唯一無二の良書なり

第三高等學校敎授
文學士 野々村直太郎先生著

宗敎と倫理

定價金五十錢
郵税金八錢

正にこれ新宗敎論なり新道德論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との衝突に惱める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗敎と舊道德とに厭けるものは遠に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附錄には二宮尊德翁の宗敎論を評す

眞宗補敎 北條蕊嶽先生著

眞宗の敎義

定價金二圓
郵税金十二錢

眞宗は實に日本佛敎の精華にして又實に日本佛敎の最大勢力なり本書は博識篤學を以て聞えたる北條師が多年の蘊蓄を傾けて宗祖親鸞上人を中心とし其師法然上人と其資蓮如上人との敎義を信仰上より研究したる結果を組織的に叙述したる者なり他力敎の秘奥を探り本願寺の盛なる所以を知らむとする者の必讀を翼ふ

アー、エフ、ステンツラー先生原著
エル、ピツシエル先生增訂
ドクトル、フイロソフイエー 荻原雲來先生譯補

梵語入門

定價金壹圓 郵稅金八錢

一部人士の梵語を學ぶ者あるも從來は皆な歐語の梵文典を使用すされど歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學はざる可からざる不便あり第二價格低廉ならす以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初歩たらしめむがために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

文學博士 高楠順次郎先生閱
曹洞宗大學教授 立花俊道先生著

巴利語文典

定價金一圓 郵稅金八錢

著者南天楞伽島に入りスマンガラ僧正の會下にありて巴利語を修むること多年共平生手記する所と迦旃延以下原語の文典と歐洲人の手に成れる巴梵兩語の語典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり叙述の前後には多大の注意を拂ひて簡より繁に入り易より難に進むの方法に從ひたれば初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶たるべし

慈雲尊者眞筆
高楠順次郎先生序
阿滿得壽先生著

悉曇阿彌陀經

定價金壹圓 郵稅金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘經なり特に悉曇と冠語せしは新發梵字に簡ばんが爲なり梵文に加ふるに漢字羅馬字音を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本、辭書、唐梁二譯を掲げたり學者此の書によらば悉曇學の一端を窺ふに易からん

平子鐸嶺先生遺著

補校 上宮聖德法王帝說證註

正價金一圓 郵稅金八錢

『上宮聖德法王帝說』はその記事切實その文詞醇古多く寧樂已往の記錄を取つて正史の闕を補ひ誠に史家必讀の書たること今こゝに贅するを須ゐす而して狩谷棭齋先生の『證註』に至つては群說を折衷し正謬を辨別して先人未發の見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尙多少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子鐸嶺先生博覽强記にして史眼犀利棭齋先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ誤れるを訂し足らざるを補うて錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

文學博士 村上專精先生編

科註原人論

定價金十二錢 郵稅金二錢

科註大乘起信論

定價金十六錢 郵稅金二錢

この二書は共に筆記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置きたれば學校の教科書學會の講本として最も適當なり

高島米峰先生著

學生參考 東洋史

定價金十三錢 郵稅金二錢

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべからむも學生を資くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑はざるなり」と

文學博士 三宅雪嶺先生著

增訂 偉人の跡

定價金壹圓 郵稅金八錢

古今東西の偉人數十名を捕へ共の時代を語り共の性格を論じ共の功過を明にす觀察警拔にして行文徼妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面目は躍如として玆に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せしか社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば讀くは此の偉人の偉著に問へ

文學博士 三宅雪嶺先生著

小泡十種

定價金四十五錢 郵稅金八錢

博士の學殖富贍に博士の見識卓越に博士の文章超凡なると世既に定評あり今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を說き文學を語り人物を評す共の筆の向ふところ流れては浩瀚盡きざる大河となり激じては繽紛限りなき飛沫となる小泡か激濁か蓋し近代稀有の快著也

明治思想小史

文學博士　三宅雪嶺先生著

定價金五十錢　郵税金六錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生今や思想の最高壇に立つて明治思想の變遷を語るまづ明治以前の思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深刻の觀察を逞しうして剴切の結論に到る今や大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大發展が果して如何なる思想の產物なりしかを知悉して依て以て第二の維新を大成せざるべからず果して然らば此書これ眞に大正國民必讀の書

此一筋

文學士　沼波瓊音先生著

定價金七十錢　郵税金八錢

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはゾクゾクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそうな方にのみ、これを售む。」と本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と

來世之有無

新佛教徒同志會編

定價金七十錢　郵税金八錢

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するのか滅しないのか元來吾等に靈魂などゝいふものがあるのか無いのか凡そ此くの如きの疑問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑團も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

現代青年論

高島米峰先生著

定價金十五錢　郵税金二錢

本書は著者が某會社の青年に向つて講演せるものゝ筆記にして各種青年會などの施本として最も適當なり內容目次左の如し

一、青年の力―二、今の青年は依賴心が强い―三、今の青年には氣概がない―四、今の青年は成功を急ぐ―五、今の青年は一事に精しくなくて多岐に勞する―六、今の青年は思想が贏弱である―七、今の青年は信仰が乏しい―八、今の青年は同情が乏しい

月刊雜誌 藝文

記者　松本博士、內藤博士、新村博士、上田博士、小川博士

一册廿二錢　半年分一圓廿錢　一年分二圓卅錢

『藝文』は京都帝國大學教授及び其他學者の研究創作を發表する機關雜誌也

『藝文』は東西兩洋の學術文藝に對し最嚴肅深刻の批判を下さむとする者也

『藝文』は關西思想界の中心として幷て關東の思想界を風靡せむとする者也

ひとみの旅

『東京朝日』記者　杉村楚人冠先生著

定價金六十錢　郵税金八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の景を描かず、風月の樂を語らず、專ら現代を寫し、人間を論ず。曾て、洛陽の紙價を貴からしめたる『大英遊記』以來の名文にして、又曾て、發賣禁止の嚴命を蒙りたる『七花八裂』以來の奇著なり。

書窓車窓

加藤咄堂先生著

定價金六十錢　郵税金八錢

天地の秘奥を探り、人心の機微を明にす、乃ちこゝに天籟あり、地籟あり、人籟あり。これによつて世界の知識を求むべく、これによつて古今の德澤に浴すべし。內に在りては書窓の良師、外に出でゝは車窓の善友、一卷の書また尊貴なるかな。

スエデンボルグ

學習院教授　帝國大學講師　鈴木大拙先生著

定價金五十錢　郵税金八錢

神學界の革命家、天界地獄の遍歷者、學界の偉人、神秘界の大王、古今獨步の千里眼、精力無比の學者、明敏透徹の科學者、出俗脫塵の高士、之を一身に集めたるをスエデンボルグとなす。吾國今や宗教思想界の風雲漸くまさに急ならんとす、精神を養はんとするもの、時世を憂ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此書成る所以。

文學博士 村上專精先生著

六十一年

定價金九十錢 郵稅金八錢

これ村上博士が過去六十一年間惡戰苦鬪の清淨史を大膽に赤裸々に叙述せられたるものにして現代青年が以て經綸とすべき絕好の立志傳たり殊にその間に於ける佛教の盛衰消長及び教界人物に對する忌憚なき評論は明治佛教の側面史として教家の一讀を要求するに足るの實錄と趣味とを具有する大文字にして眞にこれ教界未だ有らざる自叙傳なり

文學博士 松本文三郎先生著

佛典の研究

定價金九十錢 郵稅金八錢

松本博士は佛典の本文批評に於て實に日本學界のオーソリチー也多年その蘊蓄を傾けて研究せられたる佛典已に幾十人加ふるに最近燉煌その他に於て發掘せられたる佛典の研究は正に先賢未踏の新說なりとす佛典の眞僞を如何に辨別し經論の精神を如何に會得すべきかに心を勞する人まづ此書を一讀せざるべからず

久津見蕨村先生著

ニイチエ

定價金九十錢 郵稅金八錢

ニイチエの研究ニイチエの趣旨ニイチエの觀察に於て著者の如きは邦人中未だこれあらざる所今其精緻の想と奇絢の文とを以てニイチエの性格ニイチエの事業ニイチエの思想ニイチエの人生觀世界觀ニイチエの哲學ニイチエの理想を描出し人をして親しくニイチエに接するの感あらしむ

文學博士 松本文三郎先生著

增補 宗教と哲學

定價金七十錢 郵稅金八錢

本書全編十有四章まづ筆を「釋尊は何を說きしか」に起し「宗教と道德」「研究と信仰」等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據に在ることを說明し延いて老莊程子の支那哲學に論及す惟ふに病弱なる現代の思想界は此書によりて元氣の回復を求め得む乎

大內青巒先生著 結城素明畫伯畫

禪の極致

定價金六十錢 郵稅金八錢

不立文字の教理も、文字に依らざれば知ること能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但惜しむ、古來禪を說くもの、徒に難解の語句を弄して、人をして愈々出て愈々迷はしむることを。大內先生學深く德高く、教禪二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗話を以て、幽玄の理を說き、深遠の法を語ること、殆ど天下獨步、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附錄『五位頌講話』、また先生獨創の見識を以て、縱橫に講解す、蓋近來の大文字なり

黑岩周六先生著

予が婦人觀

定價金六十錢 郵稅金八錢

進步的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黑岩先生の婦人觀はトルストイ的の絕對貞操觀に融合するに經濟的獨立の實際問題を以てし種々樣々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子教育家の精讀を冀ふ

月刊雜誌

新佛教

記者 靈月、喝堂、我觀、米峰、菁洋、縱橫、秋畝、大拙

一冊十六錢 半年分一圓十錢 一年分二圓

『新佛教』は自由討究傳說排斥の大義に基き吾人の全精神を滿足しつべき新信仰を鼓吹し今日の時世に適應すべき新道德を扶植せむとするものなり

「新佛教」は光明を求め大道を傳ふ法を覓め道を竊くものにあらず

『新佛教』は自主獨立能く言ふべきを言ひ語るべきを語る他の保護の下に跼蹐して言ふべきを言ひ得ず語るべからざるを語るが如き者にあらず

釋清潭先生著

狐禪狸詩

定價金六十錢 郵稅金八錢

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の窟狸詩の窟一蹴して之を壞る其の壞端に上りしもの實に此の一書なり今や裝成りて人間に横行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしたゞそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

釋清潭先生主筆

月刊雜誌 **漢詩**

一冊五錢 一年分五十錢

釋清潭先生を中心とせる漢詩闡演社の機關雜誌にして毎號「作詩法講話」「三體詩講話」「陶淵明集講話」及び社友の作品を掲載す

別に漢詩漢文の添削代作等の規定あり切手五錢送付せらるれば規則掲載の「漢詩」一部贈呈す

土屋鳳洲先生著

晩晴樓文鈔

定價金八十五錢 郵稅金八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり說あり辨あり序あり記あり碑あり傳あり書あり贊銘あり題跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし苟も漢文を學ばむと欲するものこれを模範とせば又良師なきを憂ふるを須ゐざるなり殊に明治時代の碩學文豪辭を極めて各篇に讚評を加ふ卒然卷を開けば天下の文星一堂に會して道を談じ文を論ずるの偉觀を成す綠陰深處にこれを繙かば涼風自ら起つて神氣清爽を覺えむ

村上專精先生序 高島米峯先生著

噴火口

定價金八十錢 郵稅金八錢

著者心內に鬱積する熱火今や轟然として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を偉狀と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその舊著「廣長舌」「惡戰」等に比し來つて本書の爲論爲文更に一段の進境あるを確信するのみ

文學博士 村上專精先生主筆

月刊雜誌 **人道講話**

一冊七錢五厘 一年分八十二錢

『人道講話』は村上先生の人道講話を連載する者
『人道講話』は教育と宗教と道德との三面を有す
『人道講話』は精神の涵養を以て教育の本領とす
『人道講話』は人道の實踐を以て宗教の要務とす
『人道講話』は父母の孝養を以て道德の大本とす

東洋大學教授土屋鳳洲先生編

評釋 **唐宋八家文鈔**

定價金四十五錢 郵稅金八錢

夫の唐宋八大家文が文章の模範と仰がるゝもの久し矣惜しいかな卷帙浩瀚初學の徒却つて岐路に亡羊の嘆なき能はず今我が土屋先生これを遺憾となし八大家の名文中更にその精髓五十篇を選びこれに細評を加へて以て文章の結構作法を知らしめこれに評解を施して以て故事熟語の意義を明にす學校教科の用書として甚だ適當なるのみならず地方青年獨學の良師として實に得易からざる珍籍たり

帝國大學講師 學習院教授 鈴木大拙先生著

禪の第一義

定價金一圓 郵稅金八錢

禪は東洋に於ける精神界の特產なりしかも從來誤つて山林の徒のみによりて拈弄せられ活きたる人生と殆ど沒交涉なるかの觀ありしは蓋し未だその第一義を闡明しその着手の處を說逃することの徹底せざりしに基するものならずむばあらず著者參禪辨道三十年その實驗の歷程を精叙しその所得の公案を解說し一は以て初學者の指針となし一は以て人生の苦悶を除去せむとす不立文字教外別傳の禪も本書出てゝその近代的色彩の頗る鮮なるものあるを看取し得む

內田魯庵先生著

沈默の饒舌

定價金八十錢 郵稅金八錢

維摩の一默その霹靂の如しといふ今や日本文壇の老維摩內田魯庵先生が沈默の懷中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を庇し靈肉の調和を說き生活の難易を敎ふその情の懇切なるその論の穩健なる誠に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評し咄哉と言はむは蓋し未だ方丈の妙諦に參する能はさるもの

スエデンボルグ著 鈴木大拙先生譯

新エルサレムと其教說

定價金六十錢 郵稅金八錢

此書は思想界の奇傑スエデンボルグの新基督教說にして救濟には信と行とを要すること愛即ち意志は人格の基礎なること自由あるが故に善惡あること善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸說を簡明適切に述べたる快著

人と超人

バアナードショウ作　堺利彦先生譯

定價金九十錢　郵稅金八錢

ショウ熱全盛の今彼の最大作の譯書出づ彼れの生命哲學彼の兩性觀彼の皮肉彼の諷刺彼の滑稽彼の冷嘲彼の熱罵悉く此一篇の中に在り譯書内容は本文の外、譯者の序、原著の序、原著通俗版の序、ショウの人物及著作、革命家必携及其座右銘、私が倫敎で見た人と超人(松居松葉)等あり

おばけの正體

文學博士　井上圓了先生著

定價金五十錢　郵稅金八錢

本書は妖怪研究の大家たる井上博士が明治維新以後今日に至るまで日本の各地に起つた妖怪事實の中で特に珍な者奇な者恐ろしい者悽い者悲しい者憐れな者面白い者馬鹿々々しい者百三十件を調査して一々その原因を示し百鬼夜行の眞相を明にした快書であつて怖がるくせに化物話を聽きたがる小供のためにも「幽靈の正體見たり枯尾花」などゝ悟つたつもりの大人のためにも趣味と實益とを與へること多大である

青巒禪話

東洋大學長　大内青巒先生著

定價金壹圓廿錢　郵稅金八錢

この人にしてこの著ありといへばそれだけでもう澤山なりそれ以上廣告文でコケを威す必要いづこにかあるしかも試みに一二言を加ふれば平談以て微妙の法門を說破し俗話以て別傳の眞諦を闡明す題を設くる六十有餘悉くこれ天地の祕奥を探り人心の機微に觸る迷悟凡聖の如きたゞ讀者の擇ぶところに委するのみ

印度哲學宗敎史

文學博士　高楠順次郎先生
文學士　木村泰賢先生　共著

定價金貳圓　郵稅金八錢

本書は著者が印度の哲學宗敎の大成は日本學界の本務なりといふ確信の上に立ちて久しく東京帝國大學に於て講述せる稿本を增補整理したるものにして斯界唯一最高の權威なり收むるところ吠陀、梵書、奥義書、經書及び諸學派の開展に渉り洵にこれ印度の根本思想を說述して盡さゞるなきもの苟も世界無比の寶庫と稱せらるゝ印度古代の文明について闡明するところあらむと欲するものは須くまづこの祕鍵を握らざるべからざる也

修道禪話

新井石禪老師著

定價金一圓　郵稅金八錢

新井石禪老師は學に於て德に於て舌に於て筆に於て現代禪門第一流の人なり今や世俗の往往にして野狐禪に滿足し邪禪に墮在するもの尠からざるを見て悲心到底默止するに堪へず玆に活禪談を試みて修道處世の南針を指示す釋尊一字不說の妙諦達磨西來の眞意こゝに於てか始めて了了明明

神智と神愛

學習院敎授
帝國大學講師　鈴木大拙先生譯

定價金一圓卅錢　郵稅金十二錢

本書は天界地獄の遍歷者として學者宗敎家を驚倒せしめたる思想界の奇傑スエデンボルグ氏の人生觀を率直に披瀝したる者也愛は宇宙の本源にして智は愛より生ずる所以より說き起し造化の大功人生の目的を闡明する所論警拔斷案透徹譯筆明快

店頭禪

高島米峰先生著

定價金八十錢　郵稅金八錢

禪坊主の禪にもあらず野狐禪の禪にもあらず語默動靜皆是禪の禪也學林の禪にもあらず僧堂の禪にもあらず雞聲堂の帳場格子裡に獨り自ら實參實究したるところの禪也傳統の禪にあらずして店頭の禪也空想の禪にあらずして創造の禪也即是れ生活の實驗也信仰の告白也

禪の面目

建仁寺派管長　竹田默雷老師著

定價金一圓　郵稅金八錢

語も赤雷の如く默も赤雷の如し本來の面目眞に此の如きのみ今絕版せる『默雷禪話』二卷數百則中より奇峭の論と懇到の說とを選びて百五十則を獲たりこれを世に行ふ所以のもの主とし生死街頭に迷惑するものをして自性徹見の境地に到達せしめむと欲してなり

『修養世界』主筆　菅原洞禪師著

禪林奇行

定價金壹圓
郵稅金八錢

和漢古今の居士禪僧が奇行佳話を蒐むるもの實に百數十項一として古聖證悟の過程前賢參究の所得たらざるなし綿密なる佛祖の行履潑剌たる禪林の消息正にこゝに盡きたりと稱すべき也

禪宗演老師著

拈華微笑（ネンゲミセウ）

定價金壹圓
郵稅金八錢

釋尊拈華し迦葉微笑す個中の消息何人か會し又何人か會せざる會する者を聖と稱へむも當らず會せざる者を凡と呼ばむも亦當らず凡聖一如の境地は畢竟此書を心讀し體讀したる者にして始めて到達し得べしとなす耳

京都市平安中學講師
トーマス、カービー先生著

英文佛敎讀本

定價金五十錢
郵稅金六錢

著者は敬虔なる佛敎信者として熱心なる佛敎研究者として夙に世に推重せらるゝ英人にして本書收むる所釋尊の傳記印度諸王族の佛敎傳播に盡しゝ狀況及歐米に於ける佛敎學者の筆に成れる論文英語に飜譯せられたる佛典の拔萃並に將來佛敎の歐米に傳播すべき趨勢に關する著者の豫見等凡そ二十餘章盡し佛敎學校の英語敎科書として唯一無二の良書たり

帝國大學講師
ドクトル荻原雲來先生著

梵漢對譯佛敎辭典

定價金五圓
郵稅金十二錢

本書收むる所顯密二敎の法數名目を始め經律論三藏中の學語は勿論佛菩薩天龍八部天象地儀山川草木飮食器皿數方時より動詞副詞に至るまで語數甚だ豐富にして單に佛敎辭典としてのみならず又梵漢辭典として未曾有の寶藏なりこれを以て佛敎を知らむと欲するもの梵語を學ばむと欲するものは言ふまでもなく一般語學者印度文藝の研究者に取りても亦唯一無二の寶典たり

325
235

終